特攻平和観音会報

平成20年11月

第77号

財団法人　特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会
〒105-0014　東京都港区芝2-5-19TAビル
電　話　03（5730）1016
ＦＡＸ　03（5730）1017
http://www.tokkotai.or.jp
振替口座　00140-6-59580

編集人　飯田正能
発行人　羽渕徹也
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

第57回特攻平和観音年次法要

日　時　平成20年9月23日（日）
　　14時～15時10分
場　所　世田谷山観音寺特攻平和観音堂
参列者　御遺族37名御来賓・会員等254名

式　次　第

梵鐘点打　三回　司会　乗兼　英史
大衆着座（堂内・堂外）　野口　清三
式衆入堂　世田谷山観音寺住職　駒繋神社宮司
　国歌斉唱　トランペット　田櫓　雅之
　山主願文　特攻平和観音経
　　世田谷山観音寺住職　太田　賢照
　神　儀　駒繋神社宮司　澤田　浩治
　修祓の儀・降神の儀・献饌の儀
　祝詞奏上・玉串奉奠・撤饌の儀
　祭文奏上　特攻平和観音奉賛会
　　会長　山本　卓眞
　　熊本　哲之
　献　吟　石橋　一歌
　　吟　笛　逢坂　竜静
　献　歌　世田谷コールエーデ合唱団
　　指揮　大穂　孝子
　　（千の風になって・赤とんぼ）
奉納献奏　トランペット（海ゆかば）
　　田櫓　雅之
　サキソフォン　鈴木　隆春
全員合唱　海ゆかば
ラッパ献奏　海軍軍装会ラッパ隊
住職交代挨拶　現住職　太田　賢照
　　新住職　太田　兼照
焼　香　特攻平和観音奉賛会
　　会長　山本　卓眞
　　御遺族各位
　　御来賓各位
　　会員・一般各位
式衆退堂
池前にて、住職　読経（般若心経）
　神官　修祓・祝詞奏上後、式衆退場
直　会　15時30分～16時30分

夢違い観音像

目次

第57回特攻平和観音年次法要…1
8月15日の靖國神社とヴルピッタ・ロマノ教授の靖國考…5
靖國神社「みたままつり」に献納された懸け雪洞にみる特攻戦没者……10
靖國神社「みたままつり」に献納された特攻隊員の遺詠とその母の手記……11
靖國神社「みたままつり」に掲げられた軍神若林東一に関わる大提灯と懸け雪洞…14
アメリカでの「紫電改」の修復について……15
酒巻和男氏の講話……16
碑は語る特攻隊⑧……27
碑は語る特攻隊⑨……30
陸軍挺進部隊銘々伝②……32
石川少尉魚雷に体当たり……33
高野山「空挺部隊之墓」墓前祭…35
大西瀧治郎中将の副官・門司親徳海軍主計少佐御逝去…36
戦場の砂……36
原町飛行場関係戦没者慰霊祭…37
「特攻勇士之像」秋田県護国神社に代わり能代市八幡神社に奉納される……43
事務局からの報告等……44

献　吟　石橋　一歌
　　吟　笛　逢坂　竜信

第六十六振武隊　毛利　圭一
昭和二十年五月四日
沖縄周辺洋上で戦死
わが命惜しくもなし七度も
世にあれ出でて国を守らん

菊水五号第5神剣隊
磯貝　巌
昭和二十年五月四日
沖縄周辺洋上で戦死
靖國の花と咲かなむわれもまた
いくさの庭に散りし友らと

第57回特攻平和観音年次法要

平成20年9月23日（日）秋分の日、世田谷山観音寺・特攻平和観音堂において、第57回特攻平和観音年次法要が厳かに齋行された。

一週間振りに晴れ間を見た秋分の日の今日は、爽やかな秋風が吹き渡る絶好の法要日和となった。

今年も昨年に引き続き年次法要は神仏習合で行われる（詳しくは当協会会報第73号―平成19年11月発行―2頁以下参照）とあって、先ずは午前中、土地の氏神「駒繋（こまつなぎ）神社」に参詣した。同社は、世田谷山観音寺の北東約400メートルの下馬4丁目に鎮座まします古社で、昔から付近一帯の鎮守様として尊崇されている。御祭神は、大国主命、又の名を子（ね）の神、子の明神とも言い、五穀豊饒の神であると共に、源氏ゆかりの武運の神でもある。その謂れは、現在の社名が示すとおり、古くは源頼義、義家父子が奥州征討に当たって武運を祈願され、その後、頼朝公もまた、藤原氏征討に際して、武運祈願のため参詣され、愛馬芦毛を社前の松に繋いだという故事に由来する（詳しくは当協会会報第73号―平成19年11月発行―4頁以下参照）。

下馬5丁目でバスを降り、公園横の表参道より入り、鮮やかな朱塗りの神橋を渡って、石造りの鳥居をくぐれば、そこは銀杏や欅、松や楓などの大木が繁る神域である。石段（男坂）又は坂道（女坂）を登った小高い丘の上の御社は、如何にも由緒深き古社、辺りは森厳の気に包まれている。古来武士（もののふ）達が出陣に際し、武運を神に祈願した、その心情と決意の程がひしひしと伝わってくるような感じさえする。

境内の「駒繋之松」は五代目とあるが、高さ20メートルはあろうかという黒松の大木である。境内は実に綺麗に掃き清められていて、参詣者の心を引き締めてくれる。そういった雰囲気のある古い御社である。

駒繋神社に詣でて身も心も清めた後、世田谷山観音寺に向かう。

世田谷山観音寺の境内は、これまた松や欅、楓などの屋敷林に囲まれ、林間に苔むす古い堂塔の見え隠れする静寂・森厳の気に包まれている。その境内には、早くも会員を始め沢山の奉仕の方々の手によって受付等の準備が整い、三々五々参列者が集まり始めていた。そして、法要開始の1時間前には早くも境内は、久々の再会を喜び合う元戦友達を始め、老若男女大勢の参詣者で活気づいてきた。今回は初めて、NHKの取材班も撮影等の準備を進めていた。照り曇りの変わりやすい天候ながら、さしもの暑さも和らいだ絶好の彼岸日和である。

昨年の今日、第56回特攻平和観音年次法要に先立って開眼除幕式が行われた「特攻勇士之像」も、本山表門脇の代官屋敷前に、奉納された沢山の千羽鶴に飾られ、一際凛々しく輝いて御座します

本堂脇の特攻平和観音堂正面の祭壇には、菊や竜胆など沢山の季節の生花が供えられ、香が焚かれ、寺域中央の蓮池には、大きな緋鯉真鯉が悠然と泳いでいる。池中に立つ大慈大悲の観世音菩薩（法隆寺夢殿の夢違い観音像を模して鋳造された菩薩像―その胎内にも、特攻平和観音像の胎内に納められている特攻勇士の霊璽簿の写しが納められているという）が、慈悲慈愛の眼を注いで、特攻勇士達の御霊と御遺族を始め参会の衆生をやさしく見守り給う中、やがて14時、法要は始められた。

住職、神官らの入堂に始まり、梵鐘三打、野口清三会員（評議員）が真心を込めて撞く梵鐘の音は、余韻嫋々として樹間を流れる。次いで一同起立して国歌斉唱、山主願文奏上と続く。

世田谷山観音寺住職太田賢照山主は願文の中で、特攻烈士の遺徳を讃え、「特攻勇士の諸霊は正に忠烈の亀鑑なり。諸霊が父母の恩愛を断ち、大忠、大孝、大義、大勇に徹せし崇高無比なる境涯に相到せんか誰か万斛の涙なきを得んや・・唯、諸霊を慰め得るもの一つあり、宇内に無慮一百三十有余の独立国家の新秩序の出現これなり。

真に世紀の偉業。この赫然たるに匹（ひっ）儔（ちゅう）するもの果たして他にあらんや。

これ正に諸霊の志の顕現なり。諸霊の血の発露なり。諸霊や、大仁にして大徳、大勇にして大善なり。故に諸士の霊徳や無量なり。諸士の光顔や巍々たり。諸士の威神や無極なり・・嗚呼尊い哉、嗚呼仰がんか哉、長存不滅の光。南無特攻平和観世音菩薩・・」と、言を極め、心魂を傾注して奏上された。真に特攻勇士は、護国の鬼神となって散華され、今や平和守護の観世音菩薩となって我ら衆生を見守っておられるのである。

この後、駒繋神社の澤田浩治（くにはる）宮司祭主となって神儀が執り行われ、修祓の儀・降神の儀・獻饌の儀・祝詞奏上・玉串奉奠等の式典が、厳かな神楽舞曲の流れる中、清らかに齋行された。

続く祭文奏上（祭文は後掲）の中で、特攻平和観音奉賛会兼財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会の山本卓眞会長は、昨年当観音寺に奉納され、開眼除幕式が行われた「特攻勇士之像」の

奉納運動に触れて、本年4月五体目の像が愛媛県護国神社に奉納され、大阪芸大の学生達が中心となって結成された「日本人の心を伝える会」の初志通りに運動が実を結びつつあること、しかしながら、同会の制作に係るCD『あゝ特攻』の売上げは伸び悩んでおり、今後は当協会において、その初志を継承して引き続き全国の護国神社に奉納されるよう運動を進めることを報告された。更に、現下の国内外の情勢に見る危惧すべき状況に触れ、彼の大東亜戦争末期、我が国の危急存亡の時に際し、これを守護すべく、敢然、身を投じて散華された英霊の崇高な行動に現れた、日本人の魂の真髄を見つめ直し、日本精神の作興を図るべく、全力を傾注することを誓われた。

また、世田谷区長熊本哲之氏は、永年にわたる特攻平和観音法要に敬意と感謝の念を捧げ、昭和60年に平和都市宣言を行った世田谷84万区民の生命を預かる身として、特攻隊勇士の意志を継ぎ、安全・安心の世田谷区実現に向けて全力を傾注したいと誓われた。

次いで、献吟二曲が、石橋一歌氏の吟、逢坂竜静氏の笛で朗詠され、世田谷コールエーデ合唱団による献歌（千の風になって・赤とんぼ）二曲の合唱、更に世田谷区民吹奏楽団によるトラン

祭　文

本日、茲に第五十七回特攻平和観音年次法要を執り行うに当たり、謹んで在天の御霊に申し上げます。

昨年は、年次法要に先立って特攻勇士之像が、此処世田谷山観音寺に奉納され、代官屋敷の門前に在す勇士之像は、この一年参詣者と門前の道行く人々の目に焼き付いたことと思惟致します。

五体目の像は、本年四月愛媛県護国神社に奉納されました。「日本人の心を伝える会」の初志通りに、約三千五百枚のCD「あゝ特攻」を売り上げ得たことで、現在、仙台、東京、福井、松山、鹿児島の各地で、特攻勇士之像は、特攻作戦の史実と、その根源にある日本人の心の伝承を、無言のうちに参詣者に語り掛けておられます。

然しながら、その後CDの売上げは減少を続け、これからの像の奉納は、従来のようには進展しないという状況に立ち至りました。協会は、厚生労働省のご了承を得て、基本財産の充実に向ける予定の資金を、特攻勇士之像奉納運動に振り向けることで、「日本人の心を伝える会」の初志を継承することに致しました。一体でも多くの像が、全国各地の護国神社に奉納されることを、心から願うものであります。

次に、本日の年次法要を機に、御住職の賢照和尚は退任されて、御長男の兼照若和尚に後事を託されることになりました。賢照和尚は、先代睦賢和尚が昭和三十年五月二十四日、特攻平和観音堂の移築工事中に遷化されて以来今日に至るまで、五十三年の永きに亘って特攻平和観音のお護りを続けてこられました。この度、退任されますことは、誠に痛惜の念に堪えません。

私共は、賢照和尚の永年の御奉仕に対して、心から感謝の誠を捧げます。これからも、引き続いて特攻平和観音の奉賛に、会員一同を、お導き下さいますようお願い申し上げます。

翻って最近の内外の情勢を見詰めますと、かつて高度成長期に、一時、一億総中流ということが言い囃されましたが、今では格差社会という語が定着しつつあります。前後して、原油や食糧等の一次資源が急騰を始め、国際的に未曾有の激動期に突入するのではないか、と危惧させられる日々が続いております。

このような時にこそ我が国は、毅然として主張すべきは主張し、民族としての誇りと、独立国家としての尊厳を守り抜いて行くべきものを、相変わらず腰が引けた外交から脱却できない状態が続いています。政・官を始めとする各界指導者の不甲斐なさには、切歯扼腕の思いであります。

然しながら、若い世代の中には、我が国が根幹から崩壊を始めているのではないか、と思わせる現状を憂えて、今こそ、大東亜戦争末期に我が国が危殆に瀕した時に、己が身を顧みることなく広汎な地域で、敢然として、敵艦船等に体当たりして散華された特攻隊員の方々の、崇高な行為に凝集された日本人の心を見詰め直すべきである、という気概に充ちた人々が増えてきていることも確かなことであります。

会員一同、老・壮・青の各世代が一体となって、世直しに全身全霊を傾けて立ち向かうべく決意を新たにしているところであります。在天の諸霊、何とぞ私共の向かう所を御照覧下さり、尚一層の御加護を賜りますよう、伏してお願い申し上げます。

平成二十年年九月二十三日

特攻平和観音奉賛会
財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会　　会長　山本　卓眞

ペットの吹奏に合わせて全員で「海ゆかば」を斉唱した。

その後、本日の年次法要を機に、当山住職の座を御長男太田兼照和尚に譲って退任される太田賢照住職と太田兼照新住職の御挨拶が行われた。

太田賢照住職は、先代太田睦賢住職の御意志を継いで、昭和30年5月以来53年余の永きにわたり、特攻平和観音の御守護、御法要に、また英霊の奉賛に全身全霊を傾注され、会員始め多くの参詣者等をお導きくだされた。誠に感謝に堪えないところである。

お二方の御挨拶は後掲のとおりであるが、なお、太田賢照住職は、その御挨拶の中で、昨9月22日に自由民主党総裁に選出され、明24日には次の総理大臣に指名されることが確実となった麻生太郎氏が、吉田茂元総理大臣の外孫に当たるところから、当山表入口の「世田谷山観音寺」の門柱や特攻平和観音堂前の「世界平和の礎」の石碑の文字が吉田元総理の筆になる等、当山とは特に関係が深い謂れを話され、願わくば麻生太郎氏も祖父の志を継いで英霊の慰霊顕彰に誠を尽くして頂きたい、と申されて一同に深い感銘を与えられた。

次いで会長・御遺族を始め、参列者一同祭壇前に進んで焼香。その後、式衆一同退堂して池前に進み、池中に立ち給う観世音菩薩に向かって朗々と『般若波羅蜜多心経』の声明並びに神官による祝詞の奏上があって、滞りなく第57回年次法要の幕を閉じた。

（飯田正能記）

「　　さて私ことこの度の第五十七回特攻平和観音年次法要をもちまして世田谷山観音寺住職を退任いたします。

五十七年間余りの永きにわたり皆様方の絶大なる御指導に依りまして大過なく過ごしました事ここに心よりお礼申し上げます。

後任の太田兼照については私同様の御支援を賜りますようお願い申し上げます。

これまで賜りました御厚情に深謝し御挨拶申し上げます。

平成二十年九月二十三日

世田谷山観音寺　太田　賢照」

「　　さて私ことこの度太田賢照の後任として世田谷山観音寺住職を拝命致しました。

浅学非才ではございますが住職としての職務と僧侶としての仏道修行に精進してゆく所存でございます。

なにとぞ前任同様格別の御指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます

平成二十年九月二十三日

世田谷山観音寺　太田　兼照」

梵鐘点打　野口清三会員

献吟　吟　石橋一歌　笛　逢坂竜静

献歌　世田谷コールエーデ合唱団

特攻勇士之像と地蔵菩薩像

「世界平和の礎」吉田茂元総理書

住職交代挨拶
左 太田賢照住職　右 太田兼照新住職

8月15日の靖國神社とヴルピッタ・ロマノ教授の靖國考

大東亜戦争終結から63年目の8月15日、靖國神社には朝早くから、英霊を偲ぶ御遺族、戦友を始め、大勢の参詣者が、全国から続々と訪れた。

この日は、朝から強い夏の日差しが照りつけ、一点の雲もない晴天。気温は朝から摂氏30度を超え、昼前には35度の猛暑となった。にもかかわらず、炎天のもと参詣の人波は途絶えることがなかった。こんな時、何よりも有り難いのは、靖國神社崇敬奉賛会青年部「あさなぎ」の若者達の奉仕による冷たい麦茶の無料接待である。心の籠もった麦茶は、何よりも美味しい甘露の水と言うべきか。これまで長い間「英霊にこたえる会」の御高齢の戦友達の御奉仕によっていたが、昨年来、年若く志高き青年達に引き継がれたことは誠に喜ばしいことである。

更にこの日は、特に高齢者にとっては厳しい暑さのため体調を崩す者も多く、それらの人々の救護には、当協会の会員でもある成田日赤病院の看護師佐々木ひろ子さんを始めとする数名の看護師さん達が救護所に詰めて奉仕しておられたが、誠に有り難く、頼もしい限りであった。

靖國神社の発表によると、この日の社頭参拝者数は15万2千人を数え、昇殿参拝者数も4千5百人を超えたとのことである（なお、社頭参拝者数は、どこかの集会の主催者側発表の参加者数とは異なり、青年部「あさなぎ」の有志も加わった専門の方々による正確なカウントの結果である）。また、午前11時には、保岡興治法務大臣と自民党・民主党の国会議員が加盟する「みんなで靖國神社に参拝する国会議員の会」（島村宜伸会長）の衆参両院議員165名（代理を含む）が揃って昇殿参拝をし、また、午前中に太田誠一農林水産大臣が、午後には野田聖子食品安全・消費者行政推進等担当大臣が昇殿参拝したほか、小泉純一郎元首相、安倍晋三前首相、石原慎太郎東京都知事、日本会議東京都議会議員懇談会の議員31名等もそれぞれ昇殿参拝した。

この日午前9時から「英霊にこたえる会」主催の「第33回全国戦没者慰霊大祭」が拝殿において斎行されたが、拝殿には、全国より参集した約6百名の参列者が溢れ、折柄の猛暑に熱気も加わって吹き出す汗も拭わずに、じっと正座して真剣に祝詞や祭文に耳を傾けていた。

堀江正夫会長は、祭文の中で、かつて官房長官当時、国立の無宗教戦没者施設の建設を試み、私的諮問機関を設けて答申させた福田康夫総理が、早々と「政治問題になるなら避ける」「友人の嫌がることを貴方はやりますか」などと言って靖國神社不参拝を表明したが、自由民主党の総裁でもある福田総理が、党の運動方針の一つである、「靖國神社の参拝を受け継ぎ、国の礎となられた方々に対して謹んで哀悼の誠を捧げ、不戦を誓い、恒久平和への決意を新たにする」との明示に反し、靖國神社不参拝を明言する、不条理さを腹立たしく思うと共に、靖國神社にとって今や冬の時代ないし氷河期の到来ではないかとの懸念を示し、一方、近年靖國神社の参拝者は逐年増加し、若年層も多くなりつつあり、この若者達の中で、遊就館を参観して我が国の正しい近現代史を探究しようとする姿勢が高まりつつあること、また、拝観者の多くが英霊の遺徳を偲び、英霊が祖国に寄せられた熱い思いをしっかりと受け継いで行こうとする気持ちが満ち溢れていること、これらの国民の声を更に全体に及ぼし、近い将来において靖國神社の国家護持を実現すべく、心を新たにし、力を合わせて、各種の運動をより一層力強く推進することを誓われた。

次いで、佛所護念会教團合唱部によ

る「海ゆかば」等の献樂の後、参列者全員昇殿参拝をし、滞りなく大祭を終えた。

次いで、靖國神社境内能楽堂前において、午前10時から恒例の放鳩式が行われ、南部宮司の御発声により、参加者全員で「ありがとう」と御祭人への感謝の言葉の唱和と共に放鳩者百名の胸に抱かれた白鳩が一斉に大空へと放たれた。

引き続き10時30分から、参道の特設テントにおいて、英霊にこたえる会と日本会議の共催による「第22回戦没者追悼中央国民集会」が開催された。

始めに国歌斉唱、靖國神社拝礼、昭和20年8月15日の「終戦の証書」の玉音放送拝聴の後、炎天下約2千人の参会者を前に、三好達日本会議会長及び堀江正夫英霊にこたえる会会長の挨拶、並びに各界を代表して衛藤晟一、有村治子両参議院議員及び評論家石平氏がそれぞれ提言を行った。

三好日本会議会長（元最高裁長官）は、挨拶の中で「昭和24年の文部次官通達の失効が確認されたが、これから先の教育現場において、靖國神社、護国神社の歴史、由来等につき、実際にどのような授業がなされるか、厳に監視を怠ってはならない。また、福田総理の「相手の嫌がることはしない、だから靖國神社には参拝しない」との発言・態度は誠に残念至極であり、男の風上にも置けない、と言うべきである。もしも総理が近隣二国を本当のお友達と思っているならば、正々堂々とお友達に忠告し、その誤った考えを正すべきである。今後総理になられる方には、近隣二国の理不尽な主張に対して、堂々と反論し、靖國神社に折々に参拝されるよう心から希うものである」と述べられた。

「あさなぎ」の麦茶接待奉仕

看護師有志の救護所奉仕・右端佐々木ひろ子さん

英霊にこたえる会の堀江会長も挨拶の中で「祖国に殉じた英霊の慰霊顕彰無き国家に将来があるはずはない。戦後63年、戦後レジームからの脱却と真の日本再生が叫ばれている今日、その第一歩は総理が先頭に立って靖國神社に参拝することである」と力説された。

次いで、提言者の衛藤晟一参議院議員は、これまで学校現場においては、神社仏閣、とりわけ靖國神社や護国神社、あるいは戦没者を祀る場所へ生徒を連れて行ってはならないということになっていた。これは、昭和24年の文部省未だに現場ではその通達が生きているということで、文部科学省もそのように指導していた。新教育基本法に基づく教育改革に関連して、この問題を国会の場で問い質し、平沼赳夫日本会議国会議員懇談会会長が最終的に文書で確認した結果、「昭和24年の事務次官通達は失効していた」との答弁を得ることができた。これによって、生徒が学校行事として靖國神社や護国神社を訪れることができるようになり、また、その歴史や由来を聞くことも自由であることが確認され、逆に靖國神社などに対する誹謗、抑圧はやってはいけないということも確認された。この問題は、占領政策と戦後体制の残滓であるが、正に戦後レジームの一郭を今回崩すことができた。生徒でも総理大臣でも、誰でも自由に靖國神社に参拝できることは当然のことであって、これに対する中国などの内政干渉に対しては断固これを撥ね退け、はっきりものを言わなければ戦後は終わらない、と明言された。

続いて、有森治子参議院議員は、中国人監督による反靖國キャンペーンのドキュメンタリー映画『靖國YASUKUNI』の問題に関し、国会質問を通じて主人公の刀鍛冶の刈屋氏が映画に出ることを知らされていず、自分の名前と映像を削除するように申し入れていたこと、靖國神社の承諾を得ないまま撮影禁止場所の映像を使用していたこと、三年前の本集会の映像が無断で使用されていたこと、更に驚くべきことに、文化庁所管の「日本芸術文化振興会」から公金による多額の助成金が交付されていたことが初めて明らかにされた。同監督は政治介入説を主張し、それによって私は有りもしない政

治介入の張本人とのレッテルを貼られ、嫌がらせや中傷、非難が全国から相次いだ。しかし、全国紙四紙が刈屋氏に直接取材して、私の国会質問で明らかにしたことが真実であり、政治介入説が虚言であることを報じた。

靖國神社は本来、御霊と静かに心向き合う場である。その本来の姿を取り戻していきたいと思う、と述べられた。

更に提言者の評論家石平氏は昨年11月日本に帰化し、日本国民として初めて8月15日とい尊い日を迎えることができて感無量である、そして靖国神社の遊就館で英霊の辞世や遺書を拝見するとき、英霊達においてこそ、日本の精神、日本の美学が具現化されているのではないかと思われる、戦後日本人が大事な日本精神を失った中で、日本国民は靖國神社参拝を通じてもう一度日本の心を学び、日本精神を取り戻す大事な日がこの8月15日である、と述べた。更に福田首相は「友達の嫌がることはしない」と言うが、それは友達の論理ではあっても、国家指導者の論理ではない。国家指導者というのは、この国のプライドと国益を守らなければならない、おそらく中国の胡錦涛国家主席は福田首相のことを友達とは思っていないだろう、自国の英霊を守る勇気のない国家指導者は、どこに行っても尊敬されない、そういう指導者を戴くことは、日本国民としてとても不安であり、今のままではやがて日本が中国に呑み込まれる危険性すらある、それは絶対に阻止しなければならない、そのためにもう一度、日本人が日本精神を取り戻し、戦後体制から脱却して断固たる姿勢で対峙していかなければならない、それには先ず靖國参拝から始めなければならない。総理、政治家、国民全員が靖國神社の参拝して日本再生を誓うべきである、私の夢は、民主化された中国の指導者が東京を訪問して、真っ先に靖國神社に参拝することである、と熱烈な口調で述べられた。

三好達日本会議会長挨拶

その後、正午より日本武道館からのラジオ中継で、政府式典での天皇陛下のお言葉を拝聴し、青年合唱団による英霊に捧げる唱歌合唱の後、声明文を朗読し、参加者の総意により採択された。続いて全国キャラバン隊からのアピールがあり、更に日本会議地方議員連盟で取り組んでいる対馬視察の活動アピールが行われ、最後は全員で「海ゆかば」を斉唱して集会は終わった。

なお、以上の各氏の挨拶、提言に関連して、筆者がこれまでに、靖國神社問題に関する論考の中で、最も感銘を受けたのは、次に掲げる「日本人よ神聖なる遺産に目醒めよ」と題する論考である。これは、靖國神社の社報「やすくに」の平成11年4月1日号に掲載された、イタリア人で京都産業大学教授であられるヴルピッタ・ロマノ氏の靖國神社と日本人に関する論考である。10年近くも前の論考であるが、今なお靖國神社をめぐる情勢は、多少改善の方向に向かいつつあるとはいえ、厳しい状況にあることは当時と変わらない。本論考は、今の日本人の国家や英霊に対する精神状態を痛烈に批判した警告の論考であると共に日本精神復活への道標であり、我々に勇気を与えてくれる貴重な論考であると思われるので、靖國神社及び同教授の御了承を得て転載させていただいた。なお、同教授は平成10年8月15日に靖國神社境内で開催された「英霊にこたえる会」と「日本会議」主催の「戦没者追悼中央国民集会」でも同趣旨の提言を行っておられる。

（飯田正能記）

◇　◇　◇

日本人よ神聖なる遺産に目醒めよ

ヴルピッタ・ロマノ
（京都産業大学教授）

去年の夏、靖國神社で開催された「戦没者追悼中央国民集会」で提言をするよう、日本会議から突然依頼を受け、正直びっくりした。私は著名な先生方と共にこのような荘厳な集会で発言するには資格がないと、当初、辞退することを考えた。しかし、靖國神社や終戦記念日に関する問題も考慮したうえで、「外国人の助言が良心的な日本人に喜ばれれば」と思い、敢えて引き受けることとした。実際、私の決心には、二つの動機があった。その一つは、靖國神社に対して感じる深い親近

感であり、もう一つは「八月十五日」という世界歴史上の重要な節目に対する意識であった。

三十数年前、初めて私が留学生として日本を訪れた時、是非行きたい所の中に靖國神社があった。日本の文化、そして日本人の美しい心を愛し、また日本の歴史の偉大さを尊敬していた私にとって、この神社に憧れを抱くのは当然のことであった。国のために命を捧げた人たちのみたまを一つの神社に合祀し、国の守り神として国民全体で祀るという発想は、日本文化の素晴らしい成果であり、その結晶であると言っても過言ではないと思う。日本文化の本当の心を理解するためにも、靖國神社は重大な存在である。しかし、その発想は日本ならではの独特の現象であっても、靖國神社は人間に共通する感情の日本的な表現でもある。私が靖國神社に特別な親近感を抱くのは、実は私の父も先の大いなる戦争で戦死しているからである。この神社に参拝する時、私は日本の戦没者に対し敬意を表するとともに、我が父、そして祖国イタリアのために命を捧げたすべての人々に思いを寄せるのである。

そしてこれは私の個人ばかりのことではない。心がある人間であれば、誰しも同じようなことを感じるであろう。実際数年前だったが、春か夏の祭りの時、靖國神社境内で偶然知り合いのイタリア人に出会ったことがある。私は驚き「どうして貴方はここへ？」と尋ねた。すると彼は「私の父も戦死したではないか」と答え、「だから、この神社は私の神社でもある」と言い切った。なるほどと私は納得した。英霊が祀られている場所は、国籍や宗教に関わりなく、戦没した肉親、或いは自分の国の英霊に対し思いを寄せるところである。これは特定の宗教の儀式ではなく、人間のおのずからの、神ながらの、ごく自然な気持ちの現れである。この気持ちこそ宗教観の根底であり、人類共通の感じでもある。したがって靖国神社は決して排他的な存在ではなく、むしろ国際理解のためにも重要な役割を果たせる存在であると、私は信じている。

加えて「昭和二十年八月十五日」は世界史の節目である。ヨーロッパ大陸での戦争は五月に終結したが、第二次大戦自体がこの日に終わったのは事実ある。イタリアでは四月二十五日が終戦日とされている。だが、当時、ヨーロッパでの戦争終結にもかかわらず、未だ日本が徹底して戦い続けたことは、祖国の敗北を悼むイタリア人たちにとっても頼もしいことだったのである。当時、六歳の子供に過ぎなかった私ですら深い感銘を受け、この素晴らしい国を同盟国にしたことに誇りを感じていた。そして、遂に日本も降伏したとき、戦争の終結、動かせない事実としての敗北が、イタリア人たちにも実感されたのだった。

イタリアが昭和十八年九月八日に無条件降伏したことは日本人にも知られている。だが、その後も、何十万ものイタリア人は、祖国の名誉の回復のため、戦闘を続けていたことはあまり知られていない。勝ち目のない戦争にこれほど多くの人々が志願したことは歴史上他に例のない現象である。しかも、大半は十代の青年であり、中には少女もいたのである。また、戦闘を続けた人々には、極東に配備された何人かの軍人も含まれていた。彼らは日本軍とともに最後まで戦ったのである。したがって、厳密に言うと、たとえ少数ではあれイタリアの軍事力も、八月十五日まで戦争を続けていたのだと言えるだろう。この観点からも、私は八月十五日を重く受け止めている。

このように靖國神社に深い近親感を抱く私であるが、実際は最近この神社に足を運ぶことは少なくなった。私の心情としては、この神社に関わる問題についてあまりにも悲しみ・怒りを感じ、お参りする気持ちが殺がれた、ということがある。もともと国民の結束を象徴していたはずのこの神社が、どうして国民の間の紛争の種になってしまったのか、私には理解できない。まさに、「国家無き国」と言われている戦後日本の破綻と矛盾を、この問題が象徴しているようである。歴史観の問題は、言うまでもなく、靖國神社の位置付けを左右はしている。しかし、実際に問題なのは歴史の解釈云々ではなく、より根本的なことである。たとえ先の大戦が日本にとって間違った戦争であったとしても、また戦争の目的が何であれ、多くの国民が民族共同体のために、良心的に命を捧げた事実は動かせない。戦争の正否を問わず、すべての国で英霊は大事にされている。我が国イタリアでも、共産党系の市長がいる都市でも戦没者の記念碑は丁重に扱われ、市長は追悼儀式に出席する。英霊の追悼が尊重されていないのは、世界の中で日本だけである。今や明らかになった戦後日本の破綻も、そこからは始まったのではないか。

明治時代の靖國神社の創建によってこそ、近代国家としての日本の基礎が敷かれたと言っても過言ではない。日本人の民族としての起源を伊勢神宮に追求することができるなら、国家とし

ての道徳上の根底は靖国神社にあると言えるからだ。長い間国家観念が明確に意識されることがなかった日本では、藩主・主君に対して忠誠を尽くすことこそ武士の節操であった。国に忠誠を尽くし、国民共同体のため身命を犠牲にすることが、すべての国民の義務であると認識されるようになったとき、日本は近代国家となったのである。靖國神社は、国民が国のために自分の命すら犠牲にし、国家がその英霊を顕彰するという尊厳な公約の象徴そのものである。国家は靖國神社を見捨てることにより、その公約を破り、国家として道徳上の根底を失ってしまったのだ。今の日本では、英霊が本当の意味で大事にされているとは言えない。英霊の顕彰とは、彼らの犠牲を悲しむことだけではない。彼らの行為を国民の誇りとし、彼らの犠牲を後世に模範として伝えることである。そうすることによって、英霊の犠牲は国民全体の神聖なる遺産となり、国民の道徳観も養成されるのである。

しかし、現在の日本国家は公約を破って英霊を靖國神社で祀らないばかりか、彼らの犠牲の意味を後世に伝えてもいない。そればかりか偏った教育の結果、今の日本人の大半が英霊に思いを寄せなくなってしまった。しかも最近では、旧日本軍の兵士を戦犯視したり、あるいは、間違った戦争に巻き込まれて犬死した「被害者」と位置付けようとしている。しかし、国のため没した彼らの死は、決して犬死などではない。彼らを犬死にさせようとしているのは、無数の青年が悔いることなく命を捧げた、その精神を忘れた今の人々である。さらに言えば、国民に犠牲を要求しながら、その犠牲を本当の意味で大事にしていない日本国家自体が、国民を裏切ってしまったのだ。そうして国民の共同体の意識が弱まり、国家の無い国・日本が生まれたのである。

また、今の日本の精神状態を考えると、もう一つの深刻な現象についても悲しみを感じざるを得ない。それは、日本人の心の変化であり、即ち日本の最も素晴らしい遺産の喪失についてである。まさに日本人は「日本らしさ」を失いつつあるのである。日本文化の最も美しい特徴は、敗者に対する共感の心であった。これは他の民族にはあまり見られない日本人の美徳であり、日本人の優しい心の現れであった。この美徳は、神話時代から日本の文化を貫いてきたものであった。古の日本人は、「平家物語」に心酔し、滅びた平家の公達の運命を悲しんだ。義経は負けたからこそ愛され、勝った頼朝をあまり愛さなかった。明治の人々は、勇敢な行為の模範として「賊軍」の白虎隊を称え、さらに「逆臣」の西郷隆盛を、その失敗の故にこそ英雄視したのである。しかし、今の日本人は、昔からのその美しい心を忘れてしまった。日本軍の敗戦は、「平家物語」に勝る悲壮な出来事だった。だが、今の日本人はその偉大な悲劇の美しさに感動せず、ひたすらに勝利者の論理に従い、勝利者の観点から敗者を裁く理屈っぽい国民になってしまった。これこそ本当の敗北であり、偉大な文明の終焉である。この理屈っぽい精神こそ、現在目の前に見えてきた日本の破綻の遠因である。

中世の文人は当時の世相を憂いて、「乱世久しくつづき、しかも乱極むるに至らぬのは、未だ大悪のものが現れぬからである」と書いたが、今日は大悪が現れるのではないかとさえ考えられる。日本はいよいよ底をついたかもしれない。道徳を失った国家、昔からの美徳を失った国民は、至るべき所に至ったのではないか。しかし、大悪が現れ、乱極むるに至れば、一つの循環が終わり、新しい時代の到来を期待できるかも知れないではないか。実際、今日の日本には明るい兆しも少なくない。大悪の現れは、国民意識の覚醒を促進している。従来の価値観の見直しへの動きも現れており、偏向した教育に抵抗して日本人たることの意味を追求する青年も少なくない。一時失ってしまった国の運命に対する信念を、多くの日本人が取り戻しつつある。しかも、経済的繁栄が脅かされるようになって初めて、国民的連帯感の重要性も再び感じられてきている。日本は、確かに大きな転換期に向かっている。日本は完全に復活するか、或いは完全に崩壊するかは、今のところ占いがたい。ただ、志がある多くの人々の成功を祈るだけである。

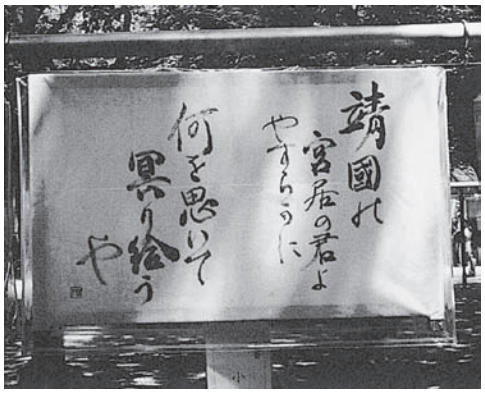
これからは日本復活の道が拓かれることを、私は希望を込めて信じている。そしてもしこの道が実際に拓かれるとしたら、それは靖國神社の復権から始まる、と私は確信している。日本人は明るい将来へ向かって国民公約を再び結ぼうとするなら、必ずこの神社に立ち戻るだろう。そして必ず、軍事力とか、経済力ではなく、過去の世代から継承し、次の世代に伝えるべき意志こそが国家というものを支えるのだ、ということを再び確認するであろう。

靖國神社「みたままつり」に献納された懸け雪洞にみる特攻戦没者

田中　賢一

特攻隊員の遺詠が二点と遺族が特攻戦没者を追想する一点が献納されていた。遺詠の一点は大石海軍少尉のもので別稿で述べる。他の一点は義烈空挺隊の関三郎軍曹のもので、前号で紹介した。したがって、今回は遺族が献納したものを取り上げる。

献納者　小栗かえで



第一〇五振武隊の林義則少尉は、4月22日知覧出撃、沖縄近海で散華している。献納者の小栗さんは林少尉の幼馴染みで、将来を約した間柄。

何を想いて冥り給うや、詠者は「ねむり」と読んで欲しいと言う。私はこの歌を見て、詠者ではなく英霊が我々に語り掛けているという気がした。現世は英霊の心に沿うものであろうか。お国のため、同胞のため何の迷いもなく身を擲った英霊の御心に、現世の人の心は余りにも乖離していないか。それでも「みたままつり」に詣でて掌を合わせている庶民は、英霊の御心に通じるものがあろう。

国の要路に在る政治家の何人が「みたままつり」に足を運んだであろうか。また、その人達が雪洞を献納したのを見たことはない。福田総理に至っては、靖國神社に参拝しないと広言している。現在の日本国の態勢で、一朝事あるとき一命を擲つのは自衛隊員である。その最高統率者である首相が、お国の為に死んだ先人の霊に頭を下げないと広言している。それで自衛隊の統率が出来ると本当に思っているのか。防衛大学校の卒業式に何やら訓示しているが、何と空々しいことか。

戦死したら靖國神社に祀られ、天皇陛下の御親拝を辱くすると、英霊の皆が信じていたことである。御親拝の前に首相の参拝がなければ、御親拝は実現しない。福田首相の下では、この過酷な国際情勢の中で、日本国が生き抜くことができのか危惧せざるを得ない。竹島は韓国に奪われ、拉致問題では北朝鮮に手玉に取られ、日本の漁船がロシアの警備艇に銃撃されて一人殺されても泣き寝入りでは、独立国として態をなさない。

大分話が横道に逸れたが、雪洞献納者の小栗かえでさんには「愛は終わり無く／沖縄の空に消えた人のみ霊に捧ぐ」と題する著書がある。その中から引用させてもらう。

最後に受け取った葉書

いよいよ今日出撃する。この期に及んで、何も言うことなし。よく尽くしてくれたお前の心を大切に持ってゆく君ありて我れ幸せなりし。体を大切に静かに平和に暮らしてくれることを祈る。では。四月二十二日

鹿児島県川辺郡知覧町

林隊　義則

静かな山の墓地へ

遺骨をお迎えして何日かしてから、村葬が行われた。立派な祭壇の上に白い箱と遺影を飾り、その前に、

一年を経て還り給いし君の御魂

全身をもって抱き参らす

待ち侘びし御魂還る日近ければ

心粧いぬ悲しみに堪えて

我を遺きて遂にゆきしか我を遺きて

武士道といふものはかくも悲しき

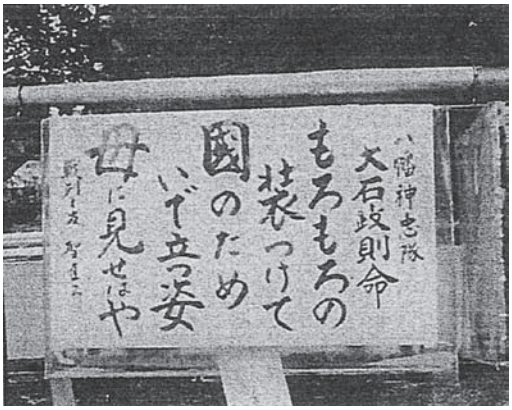
この三つの歌を短冊に書いてお供えした。あの人の家は村でもずっと山奥で、あの当時歩くよりほかに方法のないところを村の皆様が大勢参列して下さった。

戸籍抹消のこと

戦死の公報が入ると、戸籍簿よりその人の戸籍を抹消するのである。私は役場に勤め戸籍係にいた。あの人の戦死公報は戦死して半年余り経って入った。私は主任から言われて、黙って「林義則」の文字の上に静かに定規を当ててきちっと朱の斜線を引いた。末期の水をとって上げる気持ちで。

靖國神社「みたままつり」に献納された特攻隊員の遺詠とその母の手記

田中　賢一



献納者　金　文男

この遺詠を残した大石政則海軍少尉は、東京帝大在学中に学徒出陣で海軍飛行予備学生となり、任官して特攻を志願し、八幡神忠隊の一員となり、昭和20年4月28日串良飛行場を発進し、沖縄近海の敵艦に突入散華している。

母親宛の遺書の一節に「たとえ途中で墜とされることがあっても、二十代の若武者が次から次へと特攻攻撃を連続し、まずらをの命をつみ重ねつみ重ねして、大和島根を守りつくすことができれば幸ではありませんか」と言っている。そして次の歌を遺している。

「もろもろの装ひつけて国の為
　いで立つ姿母に見せばや　」

これに対し母トクさんは詠う。

「はろばろと来し方顧れば天かけし
　白マフラーの子の笑顔顕つ　」

大石トクさんには「想いで草」と題する小冊子が残されている。本稿に直接関係のある部分だけ転記する。

（途中から）

その年の十二月初旬、陸軍続いて海軍に入隊する大学生達の出征は「学徒出陣」と言う悲壮で美しい言葉で称ばれました。

政則は佐世保海兵団で五十日ほど二等水兵として過ごしましたが、その間に海軍予備学生の試験に合格、念願が叶って飛行機乗りの適性検査にも合格して昭和十九年二月一日、土浦海軍航空隊におきまして第十四期海軍飛行専修予備学生を命ぜられました。

土浦での基礎教育を終って息子は出水航空隊に移りましたが、いよいよ憧れの操縦桿を握れるようになりました。この隊での生活が短かい海軍生活で一番楽しかったようです。

同じ九州でございましたから私ども夫婦、妹や弟、それに親戚の者も度々面会に出かけてクラブで楽しい語らいのひとときを過ごしました。

士官服姿の政則はすっかり逞ましい体つきになって終始にこにこ笑みをたたえて飛行機の話や教官の話、私どもが面会に参れぬ日曜日には士官の決まりとして二等車に乗って遊びに出かけるときの話などを楽しそうに語っておりました。

昔の列車は二等車、三等車という風になっておりましたが、今日のグリーン車にあたる車両に納った士官さんがどんな遊びをするのかと訊ねますと先ず食べること、一度に、おしるこ、すし、親子丼、オムレツ、果物と聞いて私達は呆れかえって大笑いをしました。

とにかく出水航空隊での四ケ月の生活が息子にとりましては短かい生涯のなかでも最も楽しかったひとときであったろうと私は今でも想っております。

余談になりますが、私の娘、政則の妹、禎子は御縁がございまして、そのときの政則の分隊長、竹内忠治大尉と結婚いたしまして今日でも私同様、夫婦揃って政則の想い出を折にふれては語り合う日常を過していて呉れますので息子も喜んでいてくれることと思っております。

その年の夏の終りに政則は宇佐航空隊に移りました。

そして、初冬の頃、私は神風特別攻撃隊の出撃を初めて知りました。

爆弾を抱えて飛行機もろとも敵艦に体当りをするのだと聞きまして、そうまでしなくては敵に勝てないのだろうかと思いましたが、まさか息子までがそのような体当り攻撃をする隊員になろうとは夢にも思っておりませんでした。

私達家族は宇佐航空隊にも面会に参りましたが、晴れて少尉に任官しました息子は益々、逞ましい体つきになり、艦上攻撃機という飛行機の操縦にあたっているのだと誇らしげに語っておりました。

そのとき、私は駄作を一首ひねりました。

任官を　祝う母子の　酌みかわす
　　琥珀の酒の　味い深し

二十年四月の或る日、ある方から「至急、大石少尉に面会に行かれるように」と内密の連絡をいただきまして私ども夫婦は何事であろうかとやっと手に入れた切符で列車に乗り、宇佐航空隊に向かいました。

「まさか、政則が特別攻撃隊で出撃するのではないでしょうね」

満員の列車の中で主人の耳許で私が

申しますと、
「几帳面な政則のことだから親に黙って行ってしまう筈はない」
主人は不安を隠すように言いました。
列車の走り方さえもどかしく感じられる思いでようやく航空隊に駆けつけました。
二十年四月十七日のことでございます。
「大石少尉に面会をお願いいたします」
隊門でそう申し出ますと、
「大石少尉は昨日出撃されました。もうこの世には居られません―」
受付けの兵隊さんが静かに言われました。
電気に撃たれたようにその言葉が私の体を突き抜け、体中の血が地のなかに吸い込まれてゆくようでしたが、「士官の母としてまさかの時にも涙を見せてはいけません」と申しておりました政則の言葉をしっかりと噛みしめ、私は葉隠れ武士の母らしく涙をこらえておりました。
せめて息子のお友達にお会いして出撃の様子をお聞かせいただきたいとお願いしまして、五、六名の同期生の方々にお会いすることが出来ました。
私ども夫婦はその同期の戦友方と昼食を共にしながら皆様から政則の想い出をあれこれと際限がないほどお聞かせねがい、政則が目の前にいるようにしっかりとその姿を思いうかべることが出来ました。
その日の午後も特攻隊の出撃がありますとのことで、特攻隊の遺族として是非それを見送って息子さんの出撃の姿と思って下さいとの温かいお許しを隊からいただきまして、私ども夫婦はしっかりと自分の目で特攻隊出撃の様子を見届けることが出来ました。
出撃される勇士達は皆様、桜の小枝を襟に飾って水盃を交わされておられましたが、
「先に征くから、あとは頼むぞ」
「必中を願う、あとから征くからな」
と、見送られる戦友、見送る戦友は交々、明るい笑みをたたえながら語り合っておられました。
やがて、一番機を先頭に次々と滑走路を離れた特攻機は飛行場の上で編隊を組み大きくお別れの翼を振って南の方に向いました。
これが政則の姿だったのだと私はいつまでも涙も拭わずに機影に手を合わせておりました。私どもは政則が遺した鞄をしっかり抱いてその地をあとにしました。
それから十日程後のことでございます。
「マサノリオル、クシラニイケ」謎のような電報が思い当りのない方―あとで、このお方は政則の戦友の親御さんと判りましたが―から届きました。
まさか政則がまだこの世に居るとは、と半信半疑の気持で主人と私は宇佐より遥か南の鹿児島県串良に急ぎ参りました。
串良航空隊は一望の諸畑のなかにあって宇佐航空隊のような立派な建物は一つとしてありません。
ようやく見つけた隊門で、またも「大石少尉は昨日―」の言葉を聞くのではないかとの不安にかられながら恐る恐る政則の名前を申しますと、「大石少尉はただいま作業中です、暫らくお待ち下さい」との返事が返ってまいりました。
〝政則が生きていた、まだこの世にいる〟
私の顔に一度に血が上ってまいりましたが、まだ半信半疑の夢のような気持でございました。
神仏の御加護があって私は吾が子に再び会うことが出来ました。
その晩は隊の近くの一心館という旅館に三人で泊り、夜の更けるのも忘れて語り合いました。
宇佐を飛びたった政則の飛行機は潤滑油が漏れて風防にかかり前方が見えなくなったので一旦は引き返しかけたが、責任ある一番機であることから再び進路を南に向けたもののどうしてもそれ以上の前進が出来ず戻ったとのことでございました。
命が惜しくて引き返したと思われるのが辛いと政則は唇を噛んで申しました。
私は立派に整備された飛行機がそうした故障を起したのはお母さんがあなたに会いたいと思う一念が天に通じて引き戻して下さったのです。ご奉公はいつでも出来るのですから決して死に急ぐことはありませんと申しました。
その夜と翌る日の夜、
「久しぶりだからお母さんの懐ろで寝るよ」と申す息子の体をしっかり抱いて私達親子三人は「川」の字になって眠りました。ようやく這い這いをし出した頃と同じ政則の温もりが私の体中に伝わってまいりました。
いま思いますと、こうして最後にわが子を二晩も抱きしめて寝ることが出来ました私は他の特攻隊員のお母さま方には申し訳ないほど幸わせであったわけでございます。
幸い、政則はまだ直ぐに出撃する様子ではありませんでした。
朝になると隊に向い、夕方は旅館に

戻って来るという、まるで政則が学校に通っていた頃と同じように親子が朝夕に顔を会わせるという日が二日続きました。

丁度その折、娘、禎子の夫、竹内大尉が朝鮮光州航空隊から諫早航空隊に転勤になり、夫妻で私の家に立寄っておりましたので、

「政則ちゃん、あなたの居場所が分ったのでちょっと竹内夫妻に会って来て、直ぐに戻りますからね」と、

出撃の気配を感じなかった私はうっかりと申しました。

政則はそうしなさいと言うように黙って深く肯きました。

私は後に知ったのでございますが、竹内大尉は特攻隊隊長を命ぜられておりました。

同じ海軍軍人であった政則は早々とこうなることを予想していたのでございましょうか、自分の妹に軍人の妻としての万一の時の心がまえをその遺書となりました日記にも書き記してございました。

妹思いの政則は娘が私と久々の対面をどれほどか楽しみにしているかを心の底で思っていたのでございます。

それが「お母さん、行ってらっしゃい」との無言の返事だったのです。

そのとき、政則は自分が〝明日、出撃〟と知っていた筈ですが、私には一言もそのことを申しませんでした。

おそらく、自分と両親との別れの悲しさよりも自分の妹が親に会う歓びの方を考えていたのでございましょう。

その朝、私達は前の日と同じように旅館の玄関へ隊に向かう政則を見送りに出ました。

外は霧雨でした。

「お母さん、雨が降っているから此所までいいよ」

道まで出ようとする私達を政則は手で押えるようにして言いました。

「お母さんはまた直ぐここに戻って来ますからね」

これが私が息子にかけた最後の言葉になりました。

そのとき、「お母さん、明日は出撃です」一言漏らして呉れれば私は何事を措いてもそれを見送るまでいたのでございますが、息子は私の嘆き悲しむことを心配し、また、妹を歓ばせて上げたいとだけ考えていたのでございましょう。

旅館の前の道を真っすぐに歩いた政則は曲り角に着いたとき、初めて私達の方を振り返り、煙るような雨のなかで長い長い挙手の礼をいたしました。

軍服の肩に雨が粒になって光っているのが私の目に映りました。

これが私達が息子、政則を見た最後の姿でした。

「神風特別攻撃隊八幡神忠隊、昭和二十年四月二十八日、沖縄周辺ノ敵艦船群ニ体当リ攻撃ヲ決行ス」

息子、大石政則海軍大尉の戦死は海軍布告にこのように記されております。

今日の日本は世界中の国々が目を見張るほど栄えております。その日本のなかで政則と同期の生き残られた方々は立派な社会的地位を得られて国の繁栄を支えていて下さいますが、ことあるごとに「戦死した僕等の仲間が叱咤激励して僕達を日本の復興にふるい立たせたのである」と申して下さるのを聞き、私は息子の戦死は決して無駄ではなかったのだと思い直しております。

生き残られた皆様は私ども遺族に温かいお心遣いをなさって下さり、毎年、懇ろな慰霊祭を行って下さることに英霊達はどれほどか喜んでいることかと遺族として感謝申しあげております。その方々も私が九十六歳を迎えますと同時にひとり残らず還暦を迎えられました。「益々お達者で国のためにお働き下さい。国のためと散って逝きました息子をはじめ、沢山の戦死された方々がそれを願っておるのです。」と、この老いの口から申し上げ、おねがいをいたします。

私もまだまだ永生きをして折あるごとに息子の想い出話をつづけとうございます。

皆様、私の長い想い出ばなしにおつきあい下さいまして、ほんとうに有難うございました。

はろばろと　来し方顧れば　天がけし
白マフラーの　子の笑顔顕つ

九十六歳の誕生日を迎えて

大石　トク

平成二年二月佳日

串良飛行場跡にある慰霊碑

手前の橋の上で柏手を打つと、塔の上の白鳩がグッグッと鳴く。

靖國神社「みたままつり」に掲げられた軍神若林東一に関わる大提灯と懸け雪洞

田中　賢一

大提灯は昨年同様献納した。

軍神若林東一奉賛会（陸士52期）

大提灯には奉納者の名前を書き、御祭神の名前は書いてはならぬと神社で決めているので、軍神若林東一は小さく添えざるを得なかった。

懸け雪洞には二点、軍神に関わるものが出されたのは嬉しかった。

若林軍神は、ガダルカナルに上陸してから戦死するまで71日、その間52日も日記を書き残した。

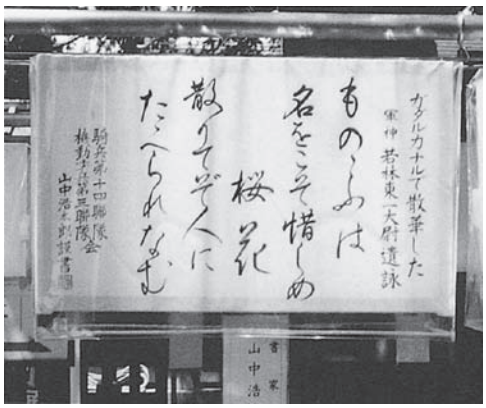
激しい砲撃の合間に壕の中で、あるいは夜半敵の砲撃が途絶えた時、蝋燭の光で書いたであろう。日記には、部下に対する愛情、不屈の闘志が現れており、所々短歌も交えた達意の文章である。本は特攻協会の事務局にあるので、購入して読んでもらいたい。

献納者　野副直行

前号で述べたとおり、野副さんは同じ絵柄の8号の油絵を描いて下され、それは山梨県護国神社の顕彰施設に掲げてある。懸け雪洞は一回限りだが、護国神社内の顕彰施設は、未来永劫に後の人に語り掛ける。

次は、私の属する騎兵第十四聯隊会の一員が奉納したものである。私が作った『ガダルカナルで散華した／軍神若林東一の日記』なる本を見て、懸け雪洞に書く文を思い付いたという。

献納者　山中浩太郎



この遺詠は、日記の最後即ち昭和18年1月7日の末尾に出ている和歌である。その日の日記の大部分を次に掲げてみる。

本日、中隊患者集合所に至りぬ。予を見るや皆声をあげ連呼し「済まぬ、済まぬ」と泣く。その状態、得も云はれず。衛生材料乏しき状態なれば療養意に任せず、逐次化膿するもの多し。その如何ともなし難きを残念とす。

昨夜の砲撃はもの凄きものなり。恐らく我が陣地付近のみにても二〇〇〇発は下らざるべし。概ね一時頃より朝五時頃まで、撃ち続けたり。敵のことながら、砲の破損を心配す。今朝、我が陣地付近は為に一段と清掃せられ、木は裂け壕は崩壊して、中々の絶景なり。最近における敵の常套的手段は、概ね午後より翌朝まで間断なき砲撃を実施、砲撃終るや飛行機上空に現出して爆撃、地上掃射等を実施、その間に敵の歩兵わが第一線に近接、バラバラと探り撃ちを始む。もし我れこれに引きつけられて地上射撃を始むるや、機を失せず後方に合図して、軽迫撃砲の射撃を命ず。斯くて、概ね午前中を終え、午後の段に移る。その間砲兵は砲の手入れ及び前夜の疲労を恢復しあるならん。斯くて、我に一睡の余裕を与えざる考えか。我もまたその手には乗らず、次第に図々しくなりあり。結局突撃力なき敵は大して恐るるに足らず。（一部省略）

そして最後に和歌二首がしるされている。

ものふは名こそ惜しめ桜花
　散りてぞ人にたたへられなむ

わが家の血筋はたとへ絶ゆるとも
　すめらみくにには永遠にはえなむ

アメリカでの「紫電改」の修復について

零戦の会会長　岩下　邦雄

当「零戦の会」は、アメリカにも支部があり、その支部長は、今もＮＡＳＡの職員であるマイクです。

数年前、彼がオハイオ州デイトン市にある国立航空博物館を案内してくれました。

広大な格納庫の一隅に、63年前に私が搭乗したことのある「紫電改」が1機置かれており、中年の技師が熱心に作業をしていました。

マイクがその技師に、私を紹介してくれて、「この日本人は、今貴方が修復しているジョージの搭乗員でした」と言いましたら、彼は意外なことに、大変びっくりした様子で、「私はトムと言います」と名乗って握手をしてきました。私も、かつての搭乗機に、このような形で巡り合えるなどとは予想もしていませんでしたから、大変感動して、「頑張って仕事をやり遂げて下さい」とお願いしました。

トムさんはマイクがＮＡＳＡの用事でデイトンに行くと、必ず「ミスター岩下は元気か」と尋ねるそうです。

それから7年が経ちました。

マイクからの連絡では、他の仕事が割り込んだり、予算の関係やらでトムさんの仕事が進まず、彼も憂慮していたとのことでしたが、やっと今年の夏までには完了の見込みと聞いておりました。偶々私と家内がボストンに住んでいる娘のところに行く予定があり、それに合わせて、6月16日に航空博物館で挙行された「紫電改」の修復完了を祝うスペシャル・イベントに出席しました。私は、博物館理事長、館長、修復担当の技師約20名等に対しお礼を申し上げました。

その晩、デイトンのレストランにトムさんやマイクを招待して食事を一緒にしました。トムさんは大変喜んで下さり、ワインでご機嫌になって、最近できた恋人のおのろけをしゃべったりして、大変楽しい一夜となりました。

私にとりましても良い思い出となりました。

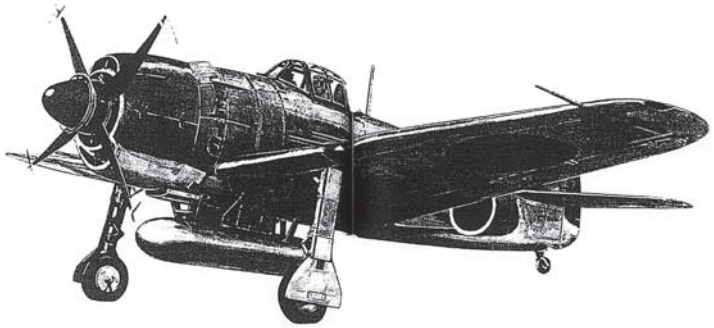
「紫電改」について

大東亜戦争開戦当初は、当時世界最強と言われた零戦の活躍で連戦連勝の勢いでしたが、米軍が零戦の二倍の馬力を持った新鋭機を登場させて対抗し始めると、戦況は一気に我が方の不利となりました。この状態を挽回するため、終戦の1年前の秋に採用されたのが、２０００馬力のエンジンを装備した「紫電改」です。

フィリピンで、紫電隊隊長として戦った私は、昭和20年1月に横空戦闘機部隊に転任し、そこで、中翼の紫電を低翼にし、太かった胴体を細くした「紫電改」を見まして、すっかり気にいりました。この年の2月に米艦載機が関東地方を初めて空襲した時、これを邀撃した横空の「紫電改」が敵機10機以上を撃墜するという戦果を挙げました。私も参戦しました。

有名な源田さんが率いた三四三空の「紫電改」は九州大村を基地にして、終戦まで勇戦敢闘し、海軍戦闘機隊の最後を飾りました。

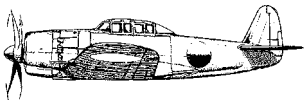
米軍は、「紫電改」をジョージと呼んでいました。



局地戦闘機「紫電」改二一型（Ｎ１Ｋ２－Ｊ）

海軍　設計・製作：川西

〔型式・構造〕単発　低翼単葉　全金属製　応力外皮構造　引込脚　全長：九・三五m　全幅：一一・九九m　全高：三・九六m　主翼面積：二三・五〇㎡　乗員：一人　発動機：中島「誉」二一型空冷式複列星型一八気筒　一八二五～一九九〇馬力　プロペラ：ＶＤＭ定速四翼　Ｄ＝三・三〇m　自重：二六五七kg　搭載量：一三四三kg　全備重量：四〇〇〇kg　過荷重量：四八六〇kg　最大速度：五九六km／h／高度五六〇〇m　巡航速度：三七〇km／h／高度三〇〇〇m　着陸速度：一四四km／h　実用上昇限度：一万七六〇m　上昇時間：六〇〇〇m／七分二二秒　航続距離：一七一五～二三九二km　武装：二〇㎜砲×四（主翼固定）爆弾六〇kgまたは二五〇kg×二（以上デ！タは局地戦闘機「紫電」改二一型〈Ｎ１Ｋ２－Ｊ〉）



酒巻和男氏の講話

海兵74期　久保　陽

「編注・本稿は、平成20年8月に刊行された海軍兵学校連合クラス会第8回全国大会（昭和55年の第1回大会以来4年ごとに開催されていたが、今回をもって打止めとなった。）の記念誌に掲載されたもので、今回特に同誌編集委員長の御了承を得て転載させていただいた。表題の酒巻和男氏の講話は、海兵74期生で丸の内界隈に勤務するクラスが中心になって始めた昼食会「丸の内木曜会」の昭和61年11月、第22回例会での同氏の講話の草稿であるが、同氏は周知のとおり、大東亜戦争開戦劈頭、真珠湾特別攻撃を行った特殊潜航艇（甲標的）の艇長（少尉・海兵68期）で、艇の故障のため突入ならず、艇を爆破し、人事不省のまま捕虜となった方であるが、屈辱の収容所生活や極東軍事裁判の弁護側証人等の経験を初めて語られた。また、同氏が戦後トヨタ自動車に就職され、昭和44年から58年までブラジルトヨタ自動車社長として勤務された経験等を踏まえての米国の世界戦略と日本の偏向、国際化時代における自己観察と是正伸長、相手観察と対応の洗練、不戦勝のために等々、貴重な提言を行っておられる。同氏は平成11年11月29日に逝去されているが、同氏の御意向もあって、今日まで外部に公表されなかった内容を、この度初めて転載のお許しを得たものである。」

◇　◇　◇

これから紹介する酒巻和男氏（68期平成11年11月29日死去）の手記は、講話の草稿で、偶然入手したものである。

74期の大半が還暦を迎えた昭和60年丸の内界隈に勤務するクラスが中心になって「丸の内木曜会」と称する昼食会を始めた。その席にお招きした先輩の海軍談議が頗る好評で、21世紀に入るまで16年も続いた。お陰でその間に、延べ100名を超える諸先輩方とのご交誼が得られた。

幾度か死線を越えての実戦体験を始め、時には古き良き時代のよもやま話、或いは海軍消滅後の人生談議など、その都度感慨深く拝聴したものである。ただ、もともと身内の会なので、講師には自由に気楽に喋って貰うため、内容については一切記録に残さないことにしていたが、今から振り返ると、誠に残念なことをした思いである。

丁度この会が軌道に乗りかけた昭和61年11月、第22回の例会は、同期の茂木明治氏のご尽力により、酒巻和男氏の招聘が実現出来た。ブラジルから帰国されて間もない頃で、多忙な中を名古屋からわざわざ駆けつけて下さった。特異な体験をされた方の参加とあって、当日は興味ある話を期待して最高の出席者で賑わった。然しこの時も、各自の胸の内におさめるだけで事情は変わらなかった。

ところが、散会後思わぬハプニングがあって、講話の草稿を手にした。原本は、新聞などの折込み広告10数枚の裏面の白紙を利用して、ぎっしりと克明に書き込み整理されており、改めて講師の誠実な人柄とこの講話に臨む熱意・真摯な姿勢に感動を覚えながら、早速一読したところ、内容は多岐に亘っており、当日1時間余りの限られた時間内では、とても全部に触れるわけにはいかず、意を尽くせなかったことは明らかであり、ご本人もさぞ不本意であったろうと推察され、我々もまた非常に心残りであった。それだけに、この貴重な資料は、いずれ機会をみて公表せねばなるまいと心に決めていたのであるが、何分にもオフレコでしたし、断りなしに公開するのも憚られ、気になりながらも今日までずっと手元に暖めた儘の結果となってしまった。

今回はからずも、この草稿が記念誌編集委員会で取り上げられ、日の目を見ることになった。永年持ち続けていた心の蟠りが払拭された上、掲載するに当たって、種々ご配慮を賜り改めて厚くお礼を申し上げる。

尚、手記はすべて原文のままであるが、紙面の都合で一部割愛させて頂いた。

◇　◇　◇

A　真珠湾戦について

酒巻でございます。木曜会の皆さん、戦時中そして戦後たいへんご苦労さまでした。

1　特潜特攻隊

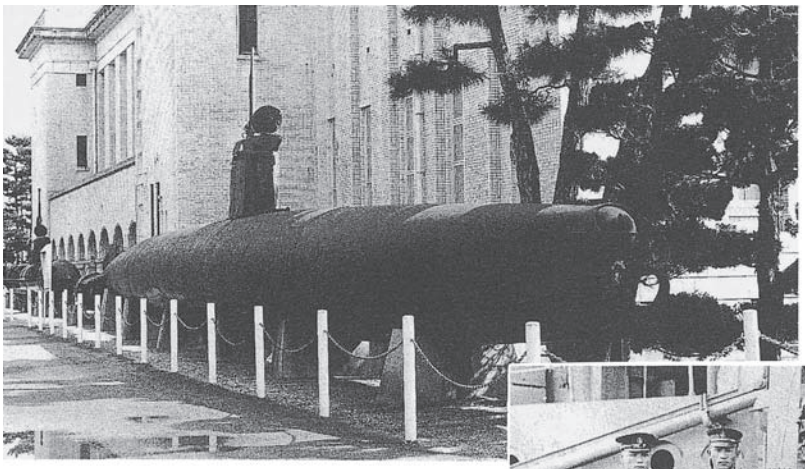
さて、私は開戦劈頭真珠湾攻撃に参加しました。私たちの特別攻撃隊は、2人乗りの特殊潜航艇、いわゆる特潜5隻であります。特潜は長さ24m、高さ3・4m、幅1・85m、排水量46ｔｏｎ、攻撃装備は魚雷2個、電池で走りますが、全速力24節、最微速4節の超小型潜水艦です。航続距離は高速で20浬、経済速力で100浬、従って日本からハワイまでの4000浬は大型潜水艦に搭載して行きました。この大型潜水艦を母艦と言いますが、私の所属した母艦はイ24潜でした。皆さんが先般この会へお迎えした鹿島建設の山本康久先輩（67期）が砲術長でした。

11月18日、呉軍港出発、ハワイへ直行しました。12月8日の丁度20日前です。

小笠原群島を越えると、もはや日本の領土、制海制空権内ではありません。絶対に見つからないよう、水中潜航の隠密行動になります。11月20日午後私は遠ざかり消え去ろうとする小笠原に向かって、思わず敬礼をしていました。いよいよ私の生まれ育った日本への最後の別れになるかもしれない。よーし、日本の発展のために、この日本を守るために、「俺はやってやるぞー、たとえ真珠湾の海底の藻屑になろうとも」というファイトの盛り上がりで一杯でした。と共に「日本よ、いついつまでも栄えあれー、さようならーさようならー」という万感胸に満ちた敬礼でした。

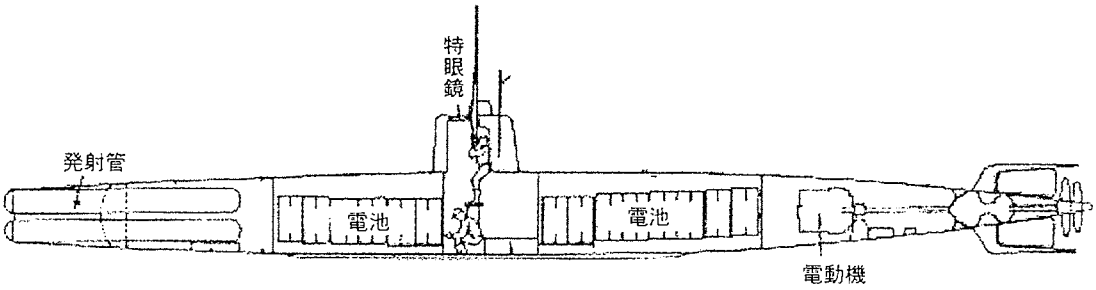
しかし、世の中というものは、なかなか理想通り思うようにはゆかないものであります。小笠原からの4年余り私は何十倍となく生死の瀬戸際にも立つというか生死の間をさまよいましたし、デモクラシー・アメリカを嘗める破目にもなりました。そして真珠湾で言わば大きな十字架を背負った恰好にもなって今日に至っております。

戦後日本に帰りますと、ジャーナリストや世間から色々聞かれますし、誤



甲標的甲型（真珠湾攻撃の一艇・江田島の「海上自衛隊第１術科学校」に展示）

第１次特別攻撃隊（母艦「千代田」退艦時16年11月10日）



甲標的概念図

解や噂で関係者に迷惑をかけては誠に相済まないので、昭和24年に「真珠湾から帰国まで」の事をまとめまして単行本にして世に出しました。アメリカの方は、内容はアメリカ人向けに少し変えましたが。

何れにしましても、戦時中のことで常識では理解できない機微な事もございます。従って私の気持ちとしては「敗軍の将、兵を語らず」というような気持ちであって触れたくないのでありますが、しかしそうもゆかないので、これから断片的に触れることにします。

2　悪戦苦闘

12月6日、私の艇のジャイロ・コンパスが全然動かなくなりました。特潜は新秘密兵器で、相当機微に出来てはいますが、コンパスがないと水面下を走る特潜としては、全くの盲目になります。艦長も非常に心配されて「どうするか」と聞かれましたが、今更やめる訳にもゆかないので「行きます」と答えて発艦しました。そのとき艇付も「ついて行きます」と言ってくれました。私は、博多沖の元寇の時、帆柱を倒して敵艦に斬りこんだ河野通有の姿を想い浮べておりましたが、発艦は12月7日夜11時頃、真珠湾口外約10浬です。私たちの計画は開戦時刻、すなわち8日の日の出までに湾内に入って沈座し、開戦時刻後に湾内の敵巨艦を攻撃して集合地点に帰り、8日夜に母艦が収容するということでした。

母艦を離れて、モーターをかけますと、ビューと水上へ飛び上がりました。ツリムが大きく狂っていたからです。開戦前の敵の直前です。見つかれば全く大変な国際問題になります。細部省略しますが、全く命がけの長時間かかるツリム修正でした。何とか飛び上がらないで動けるようになったときには、もう8日の日の出を過ぎていました。

湾口には2隻の駆逐艦が左右に警備の監視航走をしていました。このラインを突破することが次の問題です。ところがコンパスなしで舵中央のままで走るのですが、艇は真っ直ぐには進まず、必ずカーブして行きます。だから次に潜望鏡を上げてみると全く逆の沖の方へ行っていることも再三で、全く盲滅法の迷走です。露頂を多くしながら警備艇ラインに近づきますと、すぐ爆雷攻撃を受けました。結局何回も突っ込み何回も爆雷攻撃を受けたのですが、第2回目が直撃に近い最至近爆発かと思います。艇は大きくもんどりうち、二度も三度も激音があり内部被害で煙が出ます。人間も頭や腰を打って倒れもしました。やられるとすぐ深く沈んで少し避退し、被害状況を調べたり修理をします。

その頃、とっくに開戦時刻を過ぎていましたので、潜望鏡で湾内を見ますと、大黒煙がすさまじい勢いで真っ直ぐに上り、そして右へ、ホノルルの方向へ横に流れていました。「やったな、航空部隊は」と言って艇付にも覗かせ「よーし、わしらもやるぞ」と肩を叩いた。駆逐艦は全く眼の前で白い服の水兵が甲板を右往左往するのがよく見えました。駆逐艦を倒すのは至極簡単ですが、私たちの狙いは湾内の空母か戦艦でした。

この湾口駆逐艦ラインを突破し得たのは、結局8日の午後でした。そして湾内目指して走ったのですが、今度は湾口のリーフ（さんご礁）に座礁しました。これはコンパスなしの盲目航走と湾口の形状が複雑なためです。後進をかけて退ることができた場合もあるものの、何回かは後進をかけても動きませんでした。また前のバラストを後ろへ移動です。敵艦の直前で姿を現したまま、命がけでの時間がかかる修正です。今度は爆雷攻撃が出来ないので、沖の方から陸岸近くの私の方へ砲撃です。

艇内は悪ガスが充満し、気圧も2000耗で人間の生存限界状況が続きますが、とにかく離礁して調べますと、何回目かの離礁時ですが、今度は魚雷の発射装置がいかれて、どうも発射出来ないと艇付が言います。8日の午後何回も突入を繰り返したが、結局途中で座礁するので、艇付が「シンガポールにしましょう。今度はコンパスをよく整備しますから」と言い出しました。シンガポールというのは、真珠湾の次はシンガポール行きになるだろうと専ら話し合っていたからです。私は「それはいかん。とにかくもう1回突っ込むぞ」と言った。もう夕方頃です。「今度駄目だったらシンガポールにしますか」と艇付が言います。攻撃能力が無くなり敵艦へ体当たりしようにも盲目で近づく能力がない。次の使命があるし、優秀な艇付を無駄に殺してもいけないとも思った。「うん、やむを得ん、そうするか」とつぶやき回頭をして突入を始めた。最後の突撃もまたコーラルラインにひっかかり、集合点に向かうことになった。

もう夜更けになっており、ハッチを開いて空気を吸った。大気がたいへんおいしかったし、身体中が頭の芯までスーと冷却水を浴びたように清らかにしびれて、フラフラと倒れて寝込んでしまった。2人交互になったとは思うが、倒れ込んだ。月が出て薄暗いが空

は晴れていた。

集合点はラハイナ島の南西端です。9日夜明け近くに島影が見えた。ラハイナ島とモロカイ島の間に来たと思った。そして放電しつくして座礁した。岸は近くのように見えていた。艇の爆破薬の導火線に点火して外へ出た。先に飛び込んだ艇付は泳いでいたが、次第に見えなくなった。私は最初泳いでみたが、泳ぐ力もなくなっていたので、仰向けになって浮身をした。そしてそのままになってしまった。どうも磯波で打ち上げられたか、無意識に手を動かしたのか分からないが、はっと気がついた時には、岸辺で米兵に両腕を支えられていた。

3　邦人秘話

米国に拘留されてから、現地で拘留された邦人と一緒に収容所にいました。その邦人で真珠湾戦を山の上から見た人から直接聞きましたが、8日の朝、沢山の飛行機が真珠湾上空にやってきて低空飛行に移る。「最初は演習だと思った。しかも今日は、素晴らしく真剣味のこもった見事な演習だと感心した。そのうちに真珠湾が燃え始め、眼前に飛び上がる飛行機に「日の丸」がついていた。こりゃ日本機だ。戦争だ。日本がやったぞ」と気がついた。

午後になって湾口の方を見ると、気が狂ったのか海上の軍艦が自分の国の海岸へ向けて砲撃していた、という話でした。これは私の艇を目がけて発砲していたもので、時刻と場所から断定できますが、結局命中弾はありませんでした。これは、あまりに水平で近いので、艦の大砲では俯角が効かないし、目標が小さいので命中しなかったものと思います。

邦人の話では、8日の夜にアリゾナの大爆発があり、アリゾナのとどめになりますが、これは特潜による唯一的な戦果であります。8日の夜は「日本軍がオアフ島の裏海岸に上陸した」などのデマが市中に流れ、ホノルルも真珠湾の方も全く戦々恐々の混乱振りだった、という話です。

4　慢心自滅

また、米国側の記録にあり、邦人たちから聞いたことですが、12月7日夜半から8日の早朝にかけて「どうも怪しい推進器音が聞こえた。変な小さい怪物のようなものが現れて消えた」という報告が、警備哨戒艦から見張管制所へ届けられた。これは私の艇を含め私たちの特潜が探知されたものです。ところが「そんな馬鹿な事はない。それは気のせいではないか、まあ、そうムキになるな」と上級将校にせせら笑われた。再三の真剣な報告なので見張管制所長は軍港司令官などトップへ届けたが、寝込みを襲われて結局似たようなことで応急措置がとられないまま、開戦となり日本機の攻撃になってしまった。

丁度これと同じような事が、その後、日本でも起こっています。昭和17年4月18日のドーリットルの東京空襲です。漁船を改造した監視艇が北海道の南東洋上で哨戒していました。そこへ米国の機動部隊がやってきた。小さい漁船の監視艇はすぐ突っ込んだが撃沈されました。しかし、電信員は身体が海中に沈み没するまで、基地へそして東京へ機動部隊の兵力、編制、日本へ向かう動向などを電信し続けました。

この電信員たちは結局米軍に救助され、捕虜として私のいる所へ来て、涙ながらにこの話をしました。しかし、東京では「そんな馬鹿な事があるか」と言わんばかりで、どうやら早急な対応措置をしなかったようです。

監視艇の報告からは相当に長い時間があったので、すぐ措置すれば一方的な空襲にならず、すぐ反撃機を飛ばして敵空母の撃沈も可能であったのに、と私たちは地団駄を踏みました。

この監視艇の事があったので、米国の機動部隊は予定を変更し、攻撃機を予定より早く発艦させ、機動部隊も早く反転帰港するし、空襲機は母艦への帰投をやめて、中国へ着陸することになりました。

その頃の日本は、勝ち戦の連続で、提灯行列に湧き、慢心というか油断というか、おごり高ぶりがあったようです。全く油断大敵とはこのことで、心の慢心、いわゆるおごりは自分を自滅させるものであります。ミッドウエー戦にも同じ事があるようです。

5　流れの変化と新兵器

このミッドウエー戦を境にして、戦局の流れは変わってしまい、到頭最後まで流れを変えることが出来ませんでした。戦いの攻守が逆転したガダルカナルのヘンダーソン飛行場の戦闘で倒れ、収容所へ来た者から「ほんの紙一重で勝てたのに」という涙の話も聞きました。日本軍の健闘にも実に素晴らしいものがあります。従って私の体験から言っても「生死勝敗は紙一重」という実感であります。

しかし、日本の敗因には、心のおごりなどの精神的なことや、時に利あらずという運命的な問題はありますが、やはり大きい要因の一つとして、特潜に乗った者として痛感するのは、独創的新発明的な新兵器の開発力、科学技術力の差だと思います。

というのは、特潜は日本海軍の唯一

的な新兵器でした。しかしこれでさえ絶対的優秀性・威力というには一寸心がひけます。これに反して、アメリカ側は最後が原爆によるとどめになりますが、レーダーを始めとする沢山の新兵器をタイムリーに開発し活用しました。

私たちは$F=MV^2$（戦力は兵器ではなく精神力の二乗に比例する）とか、戦力は兵力の二乗に比例するから「緒戦に勝った者は勝つ」とかいろいろと言われ習いましたが、やはりテクノロジー、頭脳力の差だと思いました。そして終戦です。

B　極東軍事裁判について

1　終戦時の状況

終戦の時は、私はテキサス州のケネディ・キャンプという収容所にいました。終戦後、暫くたったある日、私は独房へ入れられました。独房というのは、いわゆる重営倉で牢屋牢獄です。その日はたまたま暑くハンカチが汗でびっしょり濡れたので、洗面所で水をかけてゆすぎました。これを番兵が見たのか、「洗面所で洗濯した。洗面所での洗濯禁止という規則に違反した」という理由ですが。

独房入りは再三再四経験していましたが、コンクリート土間2畳くらい、鉄ベット1個、毛布1枚、枕1個、あとは鉄の壁と鉄の格子です。収容所長が来て「戦争が終わり、君以外はいずれ日本へ送還する。しかしお前は、永遠にこの牢の中に居り、朽ち果てて此処で死ぬんだ」と吐き捨てるように言った。

そして、これ見よがしに私の鼻先で煙草を1本吸ってはポイと捨て、チョコレートを半分かじってはポイと投げ捨てた。最初の一昼夜は飲食物は何も与えられません。二日目からはパン1個と水またはコーヒー1杯だけで、それが毎日続きます。誰でもやせこけて眼が凹み衰弱してゆくのですが。

その時、その収容所には日本陸海軍の士官・下士官の全員、数百名がいました。同期の作家・豊田穣も一緒ですが、一応全員私に何らかの世話になっていますが、私が一緒に日本に帰れないかもしれないと、たいへん心配してくれたのですが、結局は皆さんと一緒に日本へ帰ることが出来ました。

2　弁護証人として出廷

帰国は昭和21年1月ですが、私は呼出しを受けて、極東軍事裁判に出ました。被告ではなく弁護側証人としてです。連合軍の捕虜を虐待したということで、日本の捕虜収容所の所長や関係官が、戦犯被告として裁判にかけられていました。検察側が一方的に日本は悪いというが、アメリカにだってこんな事があるという弁護証言をするという計画でした。

米国の弁護士には、聞かれるままに私の体験を話しましたが、表面はともかく現実には虐待とか先程の入獄とか、そんな生やさしい類の事ではないかもしれません。戦後40年以上ですが私はまだ何も世間に言っていません。或いは私が死ぬまで公言できないかもしれません。私は黙って辛抱しています。

そして実際の法廷では、私が証言台で一言言い始めると、裁判長から「それは国際問題になるから」ということで発言を禁止され退廷しました。翌日の新聞には、弁護証人として私が出廷したとのみ報道されました。

3　戦犯裁判と板東収容所

極東軍事裁判と言ってもやはり「勝てば官軍、負ければ賊軍」になってしまいます。私の同期生にも江田島で私と同じ分隊で人間としては良い男なのですが、たまたま一時的に捕虜収容所にかかわったので戦犯として死刑になった者がいます。

第一次世界大戦時に青島で日本軍の捕虜になって日本の板東収容所で素晴らしい取扱い待遇を受けたドイツ人は、60数年後の今日でもなお感謝の交際をしています。日露戦争の時も似たような事があったようです。日本が勝った時は一生感謝され、日本が負けた時は死刑です。まさに雲泥の差、それ以上の差ですね。だから、やるべきではないのですが、やるからには勝たねばならないのであります。

C　米国の世界戦略と日本の偏向について（敗戦後の日本の中で）

1　真珠湾の謀略

勝つための方法―何も戦争や闘争に限りません。企業だって何だって同じような事ですが、孫子の兵法では、戦わずして勝つのが上策。戦うのは下策ですが、先ず己を知り、敵を知れば百戦して殆うからずであります。

従って世界各国の政治家や軍部は、戦わずに自分の国が発展し優位に立って勝つように、10年、50年、１００年という長期的な政略・戦略と言うか、謀略・国策を絶えず練って、言外の実力をほのめかしながら、宣伝・情報に努めるのが常道であります。特にアメリカの謀略・世界戦略というものは極めて巧妙且つ強力ですが、これに関連した話をしたいと存じます。

私は米国に収容されて間もなくの頃ですが、米国士官と口論をしたことが

あります。下手をすると一発で殺されますが、この事は米国側の記録に基づいて書いたというオーストラリアの戦史家ペギー・ウォーナーさんの著書にも出ているようです。

米国士官が私に、「日本は真珠湾をダマシ討ちにした卑怯者である。ダマシ屋の悪者である」と言います。そこで私は「米国は、満州や中国から日本軍の全面撤退を要求するハルノートを突きつけ、石油などの主要資材の貿易をストップする経済封鎖をしたではないか。これでは〝立ち上がるか、しからずんば死あるのみ〟になる。そういう風に米国が謀略的な仕掛けをしたのではないか。そして〝不意打ち奇襲〟されたからといって〝ダマシ討ち〟というのは、戦略戦術を学んだエリート士官らしい言葉ではない。戦争という非常事態では、一見ダマシ討ちのような奇襲作戦も当然あり得る戦術の常道ではないか」と反論しなじりました。戦前に上からも聞き本でも読みましたが、戦後に米国側の発表でよく分かったのですが、米国は第一次大戦後のワシントン軍縮会議の時から対日戦争計画オレンジ作戦を始め、昭和5年のロンドン軍縮会議以後は、徐々に具体的な政略・戦略として進められ、昭和16年の秋には日米双方とも、いつどこで戦闘になるか、両国共に準備を整えて、いわゆる間合いをとって睨み合っていました。

従って先に奇襲したとか、しないとかいうのは「戦略戦術的にはナンセンス」でありおかしい。米国側も、だから太平洋艦隊を真珠湾へ集めていたわけです。私は現地の邦人から直接聞きましたが、アメリカは開戦と共に予め作っていたリスト通り邦人を収容し、敵性度判定については、天皇陛下のお写真を「踏み絵」として使用したこともあります。

極東軍事裁判、A級戦犯絞首刑の理由の一つに、戦争開始の責任、真珠湾ダマシ討ちの責任ということがありますが、このとき印度のパール判事のみは、「いかなる弱小国でも、この挑戦を受けて宣戦しない国はあるまい」と述べました。ということは「米国が難題を出して日本を困らせ、戦争を始めざるを得ないよう追い込んだのではないか」ということです。

ルーズベルト大統領は、「リメンバー・パールハーバー」(真珠湾を想い起こせ)というキャッチフレーズで、国民の士気を鼓舞しました。しかし、戦後になってからですが、世論の国アメリカ、デモクラシーの国アメリカが戦争を開始できるように、開戦の口実になるように仕組んだ謀略だという軍事評論家が日本やアメリカにいます。昭和36年に私がパラグアイの海軍高級将校と話し合った時も、彼は同じ見解であり、海軍将校としては常識的な事だと言いました。他の外国人でも同じ事を言う人がおります。

私に言わせれば、そんな事を論争するのは笑止千万な喧嘩両成敗的なことで、水掛け論でありますが、戦争に負けたから仕方ないとはいうものの、一方的に日本が悪いと教えられ、信じこまされているのは誠に情けないことです。それ位ならまだよいのですが、アメリカが言うことはすべて正しいのだと言い張る人さえいる昨今です。眠りから醒めて真実をつかんで欲しいと思いますが。私はブラジルの桜花会でもこの事を言い続けました。

2　敗戦後の占領政策の推移

戦争に負けた国の実状を戦史的にみても誠に哀れなものですが、同じ負けるならアメリカに負けて良かったと思います。しかし、そのアメリカでも、アメリカの都合の良いように日本を料理してゆくのは当然かと思います。日本をアメリカの謀略、占領政策通りに転換させることです。もちろんヤルタ会談やカサブランカ会談などで「日本をどう料理するか」について基本的な打合せをしてはありますが。どの戦争でも似たような常道ですが、先ず日本を二度と立ち上がれないようにすること、それが第一の狙いになります。そこで占領軍の指導に基づいて、新憲法を作らせ、その第9条で戦争放棄を、そして教育基本法などで骨のない日本人作りを考えるのが普通であります。とにかく、好むと好まざるとにかかわらず、負けた日本としては、それに従わざるを得ません。

ところが、日本にとってラッキーだったのは、戦後に米・ソ二大陣営の対立・冷戦になったことです。そして昭和25年の朝鮮事変の勃発で、米国は「日本が弱体化し過ぎてもいけない。或る程度の実力をつけさせて、日本を対ソ防衛の第一線に役立てなくてはならない」という必要に迫られました。そのため、昭和25年には警察予備隊(後の自衛隊)が生まれ、そして現在その増強が要求されております。

私は戦後、昭和22年にトヨタ自動車へ入社しましたが、工場の入口には「賠償指定管理工場」の門札がかかっており、中国へ移転させられるかも知れないと噂されて動揺していました。だから私のような者でも入社できたのでしょうが。しかし、朝鮮事変後は、アメリカは日本の工業力・企業力の培養

に注力しています。デミング博士によると、品質管理法（ＱＣ、ＴＱＣ）だとか、監督者訓練法（ＴＷＩ）などを日本に指導し、何とかして日本の工場の力づけに配慮しています。そして日本自身の努力もあって日本は「出藍の誉れ」の力をつけてきました。

私自身は、当初人事部人事課ですが、25年の労働争議の反省からトップへ「従業員の人間作り」教育制度の提案をし、「それならおまえが担当してやれ」ということで、従業員教育の仕事をやりました。従って、アメリカからの訓練手法については、相当に勉強もしました。

ともかく、米国の核の傘の下で、軍備費は極めて少なく、ただ金儲けをする産業活動に専念するという恵まれた条件が続きました。これでは経済成長をするのは当たり前です。そして日本は、経済大国に成長しました。

3　ブラジル社長会と戦史から

私は昭和33年から輸出課長として、本格的な輸出開拓と増強に取り組みました。世界各国へも行きました。そして昭和44年から58年にかけて満14年足掛け15年間、ブラジルトヨタ自動車社長をしました。

ブラジルではＶＷがトップメーカーで、アメリカのＢｉｇ３やＢＥＮＺなどが、これを追っています。自動車業界の基本問題については、社長会で最終決定をします。或る時、日本のＮ社が現地へ進出し自動車製造会社を造ろうと、その準備に努め、工場建設予定の或る州との関係では目途がたちました。しかし最終的には国の許可が必要です。国は業界の意見を徴して最終決定をしますが、この時の社長会におけるＧＭ、ＦＯＲＤ、ＶＷ社長たちの発言は「Ｎ社が出てくると、自分たちが困る。要はＮ社が出られないようにするだけだ。それには、出る場合には底なしに巨大投資がかかるような難題条件を乗せればよい」と言った。まさにいつもは言わないホンネです。

私が居る前で露骨な条件を提案し可決しました。そして「日本が世界の各市場で暴れている。要は日本を困らせ日本を弱くすればよいだけだ」とも明言しました。まあ、それが本心、本音でしょうが。通常の場合は、表面的には極めて紳士的で美辞麗句的な話合いであり、付き合いが良いのですが、やはりいざとなると、ホンネがむき出しになります。

また、日本で事あるごとに、心ある外国人や現地の日系人からよく忠告的な質問をされました。「なぜ日本では国旗をかかげ国歌を歌うことに反対するのか」、「なぜ常識を見失って理想だけに走るのか」、「なぜ人並みの自衛力を持ち、備えあれば憂いなしにしないのか」、「今の調子が続けば、日本の将来が危ない。早く独立国らしい独立国にならなければ」という類のことです。

私は海軍兵学校で「戦史」を学びましたが、その世界戦史からみましても、数千年という人類の歴史は、言わば戦争を繰り返しながら発展してきたという、栄枯盛衰の歴史でありますが、人類も所詮は地球上の生物で、生物（生きもの）には生存本能、闘争本能がある。もちろん闘争や戦争というものの形態は科学技術の発展、時代の変遷で変わります。核時代を迎えて、従来のような形態の戦争はあってはならないのですが、形の変わった闘争はあり得るし、相手が仕掛けてくれば守らざるを得ない訳です。こんな簡単な常識的な事が、なぜ日本で通用しないのか、なぜ日本人に分からないのか、というお叱り的なアドバイスです。

戦争をしたい人は誰もいません。戦争は犠牲を伴い全く悲惨です。だからといって戦争放棄も、無闘争、平和のみを唱えたからといって平和が一方的に続くというのは、単なる理想です。現実にはそうは問屋が卸しますか、そんな一方的な考えは甘過ぎるし誤りではないか。学校にいじめが皆無にならないように、やはり人間社会は十人十色であり、力の強い者は力の弱い者を狙うものです。むしろ、そうした無気力、無力という力のバランスの崩れが闘争や戦争の原因となることは歴史が示しています。若し力を放棄し、実力を備えないもの、そんな民族や国家があるとすれば、それこそ、よい鴨であり、子羊ではないかというアドバイスです。

4　仕掛人と偏向是正

昭和58年、私は定年も過ぎていましたので、帰国を命ぜられ、トヨタ自動車を定年退職しました。そして傍系会社の豊田総建の社長を命ぜられ、やはり年齢もあって、現在は顧問であります。

日本へ帰って驚いたことに、世代の交代が進んでいるということがあります。戦後の教育を受けた人が、校長になり、社長になるというような時代に移っています。この15年の間に私の人的ネットワークも薄らいでいました。私の知らない人が実権を握っています。高度成長はしたが、心のない、物と金の亡者の世界という感じさえします。それも歴史的にみて、米ソの対立という国際関係の幸運に恵まれた、言わば「一時的な成金」に過ぎないかも

しれないのに、「自分たちに実力があるんだ」という自惚れ的な偏見・偏向があるようです。本当の骨というか、忍耐と努力の強さが、特に飽食時代に育った人に懸念されました。

私たちはよく歴史を振り返り、正すべきは正し、偏向は是正しなければなりません。歴史は実力者によって動かされています。コロンブスのアメリカ大陸発見後、先ず世界を制し動かしたのは、航海術にも長じたスペインやポルトガルでした。18世紀は農業生産力を高め、ナポレオンも出現したフランスでした。しかし、１８０５年、トラファルガル海戦でネルソン提督の英国艦隊がフランス艦隊を破ってから、19世紀はイギリスでした。工業力を持った大英帝国が世界を制して、日の没するところなしになりました。

しかし20世紀、今世紀になってからは、重工業力ヘビー・インダストリーの力で世界一となったアメリカが、特に１９４１年大西洋憲章と共に世界のトップリーダーとなりました。「驕る平家は久しからず」と言いますが、世界のトップリーダーの交代歴史を振り返ると、その感が強いのであります。フランスやイギリスもトップになって栄華に耽っています。私はこの眼で見てきました。アメリカもまた然り、と言いたいような状況が見えています。即ちアメリカが西部劇で見るような開拓マインド（フロンティア精神）が強かった時代は実に素晴らしかった。しかし第二次大戦後に「アメリカの人心道義」に弛みというか頽廃が見られ、落ち目の道を歩んでいます。

もちろん、未だ総合的な実力はトップであり、世界のリーダーでありますが、「飼い犬に手をかまれる」というか「出藍の誉れ」というか、日本の経済力に押され、「庇を貸して母屋を取られる」ようになりかねないことさえあります。

しかし一方、日本の中を覗きますと、折角経済成長をしたのに、世代が交代して、アメリカの悪い堕落的なことを真似て、アメリカの悪と同じような現象が目につきます（麻薬・セックス・いじめ等）。これは41年前の敗戦に伴って、勝者の意向で１８０度的な転換をしたものの考え方、やり方に大きく起因していましょうが、我々は戦前・戦中のことも体験しているので、仮に戦後の押しつけられたデモクラシーに無理なところがあっても、とにかく日本の再建復興へと頑張ってきました。与えられた、日本で理解しているデモクラシーが本物のデモクラシーと違う点が沢山あって、私自身も指摘したかったが、それを言う資格も権威も実力もないのでただ辛抱しました。皆さんもそうでしたと言えるかもしれません。

しかし、世代の交代変更は40年50年というのが一つの目安的な年限でしょうか。戦後40年を過ぎ戦争や敗戦による実情を知らない人たちの世代に移ろうとしています。言わば世界も日本も大きな歴史の曲り角にさしかかろうとしています。まさに非常時でありますが、私は、そしてブラジルの日系人たちで話し合った結論は、敗戦という特殊事情下に与えられた憲法や教育基本法などについて謙虚に是正しなければならない、その方向への努力をしなくてはならないということでありました。

5　三転したアメリカの対日戦略

戦後アメリカの対日戦略は三転しました。占領直後は日本の弱体化、戦争を放棄して平和の念仏だけを唱える骨抜きにすること、朝鮮事変後は輸血強化です。ところが昭和30年代に経済成長をしたので、出る釘は打てということで、今度は経済戦争を含めて日本を叩く作戦へと反転したのであります。その作戦の場合は、やはり孫子の「戦わずして勝つ」という上策です。それはできる限り自分が表面に出ず、すべて身代わりになり、生け贄になる者に責任を、すべて罪を被せるという方法であります。これをscapegoat systemと言いますが。例えば、日本の現憲法も日本が作ったし、戦争を起こしたのも日本だということにしています。経済摩擦・円高も一方的に押しつけ、G5の決定も日本の決定だという体裁にします。フィリピンのマルコスからアキノへの政権交替もアメリカの筋書き通りですが、フィリピンがやったことにする。アメリカは素晴らしい情報組織網と遠謀術策の能力を持っていますが。更に言えば、日本列島改造論を唱えて日本を急成長させた田中角栄は、コーチャン発言で火を燃え上がらせて叩きのめしたと外国人の間で笑っていた。日本を韓国などに牽制させるため、殆ど名古屋に決まっていたオリンピックを突然ソウルにするなど、謀略・裏の根回し、裏の裏まで読んだ作戦です。

ともあれ、日本はアメリカの保護国、属国であると言えます。表面的には、あるいは言われる通りにしなければならないでしょう。そして協調的に動かざるを得ないし、そうしなければなりません。しかし、その真意を見失わないようにしたいものです。

敗戦は、大きな歴史の流れの中における一つのやむを得ない転換でした。大きな波のサインカーブの一つでしょ

う。

今やそのヒズミが出てくるばかりか、押しつけられたものだけに、そこに大きな偏向がありました。この偏向を認識し反省しないで、即ち偏向と認めないで、それが正しいんだという偏向があることに強く固まりつつあります。

この偏向を是正してゆくことは、何か大きな機縁（事件や事変など）が起こらない限り、すぐには是正できない問題があります。しかし、そうした方向へ努力しなければならないことが、高齢化した私たちに残された課題であり、責任ではないかと考える次第であります。

D　国際化時代について

1　国際化時代の到来

文明と交通の発展により、今や世界の片隅で起こった事件や情報もすぐ世界中に伝わり、テレビで見聞できるし、24時間以内に現地へ行ける時代になりました。時代は流れ、変遷しています。

従って、現在でもビルマやタイ、ブラジルやアルゼンチンの奥地では、鎖国的社会主義というか、「清く、等しく、質素に」をモットーとして、国際的交流、国際化への反対風潮がありますが、今や国際化してゆくことは避けて通れない道であります。

日本の構造体質上も、国際的な共存を図らなければならない。国際的な人や物や金などの交流をしない限り日本は生き残れないし、日本の発展も望めないのであります。もはや経済大国になり、経済面ではアメリカに代わって日本がリーダーシップをとるようになりました。東海の日本から、世界の中の日本になりました。従ってこれからは、好むと好まざるとにかかわらず、日本は国際化しなければならない。更に水は高きから低きに流れますが、日本の中は人、技術、金、仕事、物などが高いというか、過密というか、多いというか、胸苦しい、生活のゆとりさがない方が高い状況です。ですから、どうしても日本は国際化してゆかなければならないし、全世界的に見ても、人類の国際化時代だとも言われます。21世紀以後になりますが、更に人知が進めば、人類の地球化時代、更には宇宙化時代になろうかとさえ言われています。

明治維新後開国文明化の成長脱皮をした。更に、敗戦で民主化への脱皮成長をした。我々は、この国際化時代にどう対処すべきか。孫子の兵法でいう先ず己を知り、相手を知らなければなりません。とやかく細かい作戦を論ずる前に、この基礎になる研究対応が肝要です。そこで日本自身のこと、外国と外国との比較に分けて話を進めたいと存じます。

2　自己観察と是正伸長

先ず日本自身をよく知らなければならないのですが、一般的に言えば「うぬぼれ」が強い。過信や野心を生みやすい。単細胞で熱しやすく冷めやすいことは、前半に言った通りですが、これに関連して二つのことを申し上げます。第一は「遠近法の錯覚」ということです。これはアメリカのボールディング博士の説でありますが、人は自分に近いものを大きく見誤りやすく、遠いものは小さく見誤りやすい、ということです。

私はアメリカやブラジル、アルゼンチン等で「日本を知っていますか」と質問してよく話し合いましたが、案外に日本というものを知りません。というのは、彼等が習い使う平面の世界地図は、大西洋を中心にした世界地図であります。太平洋を中心とした世界地図を使うのは、日本とアジアなどの一部でしょうか。従って、日本は世界地図の端の方に、赤い点々とした豆粒ほどの小島国です。中心に描かれた自国と比較して、日本という国は豆粒のような小さい国だし、そこの背の低い日本人がそんなに偉いとか力があるようには思えない。そんな国の人に尊敬せよとか、耳を傾けるような気持ちが起こらないようです。

ブラジルでは長年の日本移民との生活で、日本人というものを評価しています。「日本人は真面目で良く働く」と。これは逆に言えば「日本人は馬鹿正直で愚直だ。だからこれほど騙しやすい相手はいない」と見られています。これを露骨にブラジル人が私に言ったのはテルアビブ事件の時です。ハラキリやカミカゼ自爆突撃と同じで、日本人は単細胞性があるので、一寸おだてれば自分の生命まで投げて極めて危険な、極端に走るキチガイである。御しやすい人種だと思われています。

戦後の日本人、日本にいる日本人は、金と教育を持っているので、必ずしもさほど馬鹿扱いにはしていません。しかし、見たところ身長も低いし、風采も別に大したことはないので、多くの一般外国人からは、豆粒のような小国で、騙しやすい、力もない日本人ぐらいに見られています。

3　相手観察と対応の洗練

次は、相手というか、外国を知ることであります。外国が日本と比較してどう違うかを正しくつかまなければなりません。国の発展の基本要素として、

国土、資源、人（数と力）と言われます。そこで、これについて、私の体験から比較しながら申し上げます。

先ず国土です。日本は狭い島国ですが、その7割が山であります。これに反して国によって差がありますが、平均的には3割が山であります。従って国土の有効面積は広い大国の外国が更に大きさを持つことになります。

「ブラジルや　尖塔が見えて　次の町」ということを、ブラジル内陸部を旅行して痛感しました。どういうことかというと、ブラジル国内を走ってみると、広い農園が果てしなく続き、車で走って行くと、地平線の彼方にキリスト教会の屋根の頂上にある十字架の尖塔が見えてくる。更に走ると次第にその下の家が現れ、そして次の町になるということです。

地球が丸いことを、私は再三海上で体験しました。しかし日本では陸上で体験し難いのですが、外国へ行くと、陸上で地球の丸さを体験する場合が多かった。「ブラジルや　尖塔が見えて　次の町」は、まさにこれを表現しており、如何に外国の国土が広大かを物語っています。

私が終戦時にいたテキサスのケネディですが、独房からは農園が見渡せました。トラクターで農園を耕耘していましたが、作付け栽培するのは3分の1の部分です。他は次年度の作付け用に土地を掘り起こしたままにし、次の3分の1は肥料になる草を生やしたままにしています。3年ごとに1回の農耕です。それだけ広いのですが、日本は耕して山嶺に至り、肥料と労力を重ねています。現在、日本の米が問題になっていますが。

ブラジルは日本の24倍の広さですが、このブラジルを北半球に持ってきますと、南はインドネシアのジャカルタ、北は和歌山県の南方になります。東を東京としますと、西はシベリアのバイカル湖。この間をすべて陸地にすると、ブラジルと同じ大きさになります。国土の大きさを比較しました。

次は資源です。ブラジルは１０００億ドルの外貨を抱え、インフレで悩んできました。他事ながら私たちは大変心配していましたが、ブラジル人は案外に平気です。それは豊富な資源に恵まれているが、その資源を開発して国を発展させるための借金であったからでもあります。政府の高官は私たちに言いました。「１０００億ドルの借金、それぐらいは開発中の金山の一部に過ぎないよ」と。

ブラジルのインフレは、オイルショックで高まりました。石油資源はあるのですが、未開発、潜在資源であって顕在資源ではない。私が行った時（石油危機の前）には、石油自給率が20％程度でした。石油危機と共に石油資源の開発に注力しました。現在の自給率は50％になっており、数年後には80％の自給率になる計画になっております。

蜜柑畑を通って、蜜柑を取って食べても警察は泥棒として捕まえません。沢山取って袋に入れて持ち帰るようなことをすれば、初めて蜜柑泥棒ということになります。持てる国と持たない国（蜜柑一つ取っても泥棒になる国）は、このようなことでも推測されるでしょうか。

サンパウロ大学というのは、日本の東大のようなもので、明日のブラジルを背負う人材を養成しております。明日のブラジルのバロメーターです。私が行った頃、サンパウロ大学の学生数の占拠率で、日系人は13％から15％位でした。しかも日系人は成績優秀でした。ブラジル国内の人口比でいうと日系人は0・7％なのに、それだけ日系人は教育熱心であり、二、三世も頑張っていました。ここにも日系人・日本人の優秀性があります。

日系人の前には、アラブ系の学生占拠率や成績が優秀でした。それが日系人に移ったのですが、最近では韓国系の学生が増し成績も優秀で、日系人は落ちてきたというように聞いています。人は数と質を伴うものですが、やはり努力する者は向上し、驕り怠ける者は落後してゆきます。これは経済界などでも同じことですが、北中南米の経済界を握るのはユダヤと言われて、アメリカはユダヤで動いているとも言われます。東南アジアは華僑、アフリカはインド人が経済界を握っていると言われ、私も現地で実感しましたが。

4　不戦勝のために

戦後41年、最近の日本の状況はおかしくなってきています。内憂外患こもごも至るという感じさえします。内憂とは、敗戦による考え方、やり方の転換に含まれる偏向が、いじめとか詐欺商法とかにツケとして出ていますが、倫理道徳が基礎から落ちていることです。戦後の学校教育で仕込まれているので、その偏っていることを、偏っているのではなく正しいんだと信じ込んでいるという、偏りであります。

これは与えられた憲法、それに基づく教育基本法に起因すると思います。この偏向を是正しない限り日本の将来は危ういということになるでしょう。急激な是正はできないが、その方向への認識向上と実施推進が望まれます。

外患とは、日本の経済成長、貿易収支の大幅黒字などに伴って、国際摩擦、経済戦争とまで言われる事態になっていることであります。水は高きより低きに流れる如く、日本から海外投資、企業進出、移住が進んでいます。海外での国際摩擦という問題が多くなると思います。

この内憂・外患ともに言わば国際化時代、新しい時代に対する我々の試練であります。私は、日本が生き残り発展して行く大きな節目であり、成長脱皮の時代だと思います。我々は明治維新で開国し文明化するという成長脱皮をし、昭和20年の敗戦で封建性を捨てた民主化という成長脱皮をした。今や世界の中の日本として成長脱皮という国際化を成就しなければならないと思います。

この脱皮成長を孫子の言う不戦勝、戦わずして勝を取って行かなければなりません。国際化時代に対応した日本人の脱皮成長であります。どのような脱皮かは既に話したことに出ていますが、今後の実施推進段階で私どものトヨタ自動車での体験から、このようなことに心掛けてはということを二つ申し上げたいと思います。

第一は、「なぜを5回以上、真の原因を」ということです。国際社会問題には、一般的な我々の日常問題も同じでしょうが、すべて複雑微妙なもので裏の裏があるかと存じます。問題の表面のみでとらえることなく、なぜそうなったのか、その原因は何かと追求します。なぜそうなるのかと、答はまた、なぜそうなるのかと、「なぜ」を5回以上繰り返して追求するのがトヨタ方式であります。「読書百遍意自ら通ず」と同様に、なぜなぜと追い込み、単なる原因ではなく、真の原因をつかんで処理しなければ問題は根本的な解決になりません。

第二は「共存共栄、粘り勝ち」

闘争は力の均衡の崩れから発生します。日本と外国では国土や資源など、構造や体質的に大きな不均衡があります。水は高きから低きに流れるので、日本に力が高まれば海外へ進出するのが自然かもしれません。進出の形態は時代によって変わりますが、ブラジルへの移民ということでは日露戦争後、昭和初年（5年前後）、昭和30年初めに多くなっています。

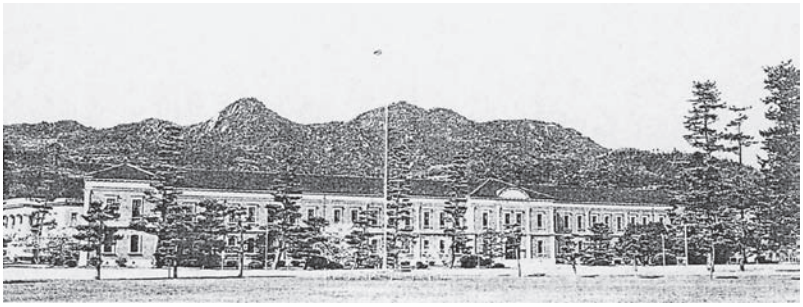
ブラジルでは「ブラジルを愛さない者はブラジルを去れ」と言われ、サッカー国際試合などがある時は、車で動く場合もブラジル国旗を振りながら応援します。そうしなければ殴り殺されるかも知れません。それ程に愛国の熱意に燃えています。国や民族との一体感が強い訳です。自分の個人生活だけが現在のままで豊かに続けばよいということで、アメリカ50州の1州になってもよい、ソ連の一部になってもよいと考えるようになっては、それこそ自分の生活もみじめに崩れましょうか。私は戦前の台湾や韓国、インカ帝国の遺跡などを見て、絶対に他国の支配下で民族や国家の真の発展は望めないと痛感しました。

確かに戦前の考え方、やり方には悪いところもありました。戦後の考え方、やり方のすべてが偏っているということでもありません。偏っているものは偏っていると謙虚に反省して正し、大義に立脚した国際化時代という新時代に対応した新しい考え方、やり方に改めるべきだというのが私の持論であります。

日本が国際社会の中で共存共栄を図ってゆくには、信頼関係を強化すること以外にない。米国がこのところ力を落としていることを認めはしても、総合的な力は依然としてあり、絶えず強い復元力を示していく国であることを知らなければなりません。やはり国際的な共同歩調をとりながらも、国の構造体質を見極めて、不撓不屈の折衝を進めて、平和裡に粘り勝ちをすべきでしょう。

戦争と平和に関連しては不戦勝、国際化時代に関連しては共存粘り勝ちを訴えまして私の話を終わります。皆様のご健勝ご活躍をお祈りいたまして私の話を終わります。

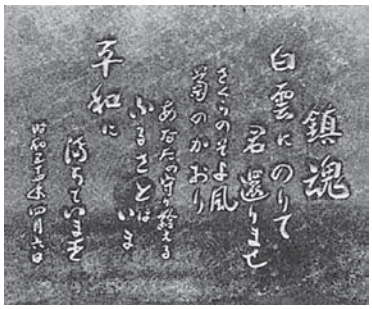
（文責　丸の内木曜会）



碑は語る特攻隊⑧

田中　賢一

現在の鹿児島空港は溝辺の十三塚原にあった海軍飛行場の跡で、第二国分と呼ばれていた。



この飛行場からの出撃は、3月18日から6月3日までの9回で、機種は彗星、九九艦爆、合計160機、戦死者は218柱となっている。ただし、一部第一国分出撃者が含まれている。

ここで、4月6日に出撃して散華した時任正明少尉について、心情を偲んでみよう。

第一草薙隊名古屋空

海軍少尉　時任　正明　25歳

鹿児島県菱刈町出身、第13期飛行予備学生昭和20年4月6日、沖縄沖敵艦船に特攻出撃戦死、九九艦爆搭乗

遺　書

本日突如国分に進出、明日を期して出撃します。名古屋より転出の途中、本城の上を高度二千米にて通過しました。感無量でした。敵来襲の頻化と皇国の防衛に二十五年の運命を賭して立派に武士の子として戦って来ます。

今更に残し置くべき事もありません。唯、慈愛深き御両親に今日迄、正明何等恩報ずるの事なく唯々残念に思い居ります。二十五歳の今日迄何不自由無く今此の光栄ある攻撃隊の中堅将校として参加し得るの日を得さしめ下されし御両親他皆々様の御養育限りなく身に沁みます。

明日の出撃は勿論生還を期し得られません。然し心中誠に静かなるものがあります。

正明は皇國防衛の前堤として莞爾と散って行きます。

國分農学校の当直室に此の書を進めつつも、本城の家に帰っている様な気がします。今夜の星は又、特に美しく御両親の面影が目前にちらつきます。

桜花爛漫と咲き薫る南国を飛び立って小生の故郷鹿児島を出撃の第一線に為し得たる事は何にも代え難く喜ばしき事です。

正明、桜花咲く靖國の社、智三人の兄上の許に、そして親友松本峯一の居る所に一足先に征きます。

御両親様の悲しみは小生にとって最も苦しい事です。正明は満足です。

今日は一時頃到着しましたが、業務多繁、遂に連絡する暇がありませんでした。お許し下さい。

父上にも母上にも現下、日本の現状に既に覚悟ある事と思います。日本は皇國です。絶対不滅です。

我々は此の信念の下に生きてきました。人類の正義の道を示すものは皇國の道にあると思います。書けば果しなく思えば尽くる事もありません。

身を潔め心を静めて明日は南海に散ります。父様、母様、末永く御身大切に。

小生と共に散る人は、兵学校出身高橋中尉です。縁あらば宜敷くお願い致します。

荷物は後の分は名古屋空第一士官次室海軍少尉厚地兼之助氏か、川野良介氏に頼んで置きました。連絡して見て下さい。

遺髪とも云う可きものは残しません。帽子、短剣を正明と思って居て下さい。

部隊名　神風特別攻撃隊草薙隊

海軍少尉　時任正明

（四月五日夜国分基地国分農学校の一室にて書かれたものです。）

◇　◇　◇

海軍少尉　時任正明

（姉）川路　貞

眼を閉じると、今も尚昨日の事の様に耳許によみがえってくるあの声、あの笑い声。

出撃の前夜だった。

「姉さん、いよいよ征きますよ。亡兄さんの処へ。後を頼みます。しっかり後を頼みますよ」と何時もと少しも変わらぬ、否それよりもっと落ち着い

た静かな声が、はるかに遠く受話器にひびいてきた。

出撃の前夜！それは四月五日の夜だった。廿三夜の月とて、餅をついて武運を祈る夜だった。

役場の小使いさんが、真夜中急に「時任さん国分の息子さんから電話です」と知らせて下さった。

先に父が起きて行った。しばらくして「息子さんがお発ちになるそうですから、お母さんもきて下さい」と、また小使いさんが呼びに来られ、母も行った。最後は祖母と私だった。

〝国分の息子〟何か心に解せないものがあり、弟からだろうかと思い、まさか、と亦打ち消しつつ、月明かりの薄明るい中を、私は智子を抱き、祖母は当直の方にたすけられつつ役場まで歩いて行った。

そして、「明朝早く沖縄に出撃する」という弟の声を聞いた。

真夜中の静まりかえった部屋の中に、祖母、父、母、それに私、思い思いの声が受話器にすがる。夢の中にいるような気持ち、だが夢の中の登場人物にはまだいくらかの感情がある。しかし、電話の前に並んだ私達には、感傷も感情もない。まして涙もない。只心残りなく征かしてやりたい、精一杯励ましてやりたい。その気持ちだけが、頭の中でたえず渦巻いていた。

最初父がたった。

「正明か、征っておいで、家の事は何も心配いらないよ。立派に戦っておいで。成功を祈る。決して見苦しいことのないように・・」と言った父に「お父さんですか。何も思い残すことはありません。満足です」と答えたと云う。

次に代わってたった母に、元気のよい声で「お母さんですか。この前、いろいろの送りもの有り難うございました。友達も皆大喜びで頂きました。今日は午後一時頃国分に着きました。明日は発ちます。お母さん、お体を大切に、おばあさんは元気ですか」。

ちょうどその時、祖母は風邪気味で寝込んでいましたが、「お元気ですよ」と答え、「正ちゃん、いよいよ征きますか。元気で行って下さい。明日は何時に発ちますか」と申しましたところ、「時間は申されません。荷物を農学校に頼んでありますから受取りにきてください」「それではこれからすぐ行きます」「来られても面会はできませんから、飛行機でも見送ってください」と答えたという。心急くまま祖母を当直の方にお願いして、一足先に部屋にはいっていた私は母と代わった。

「正ちゃんね。元気でお行きなさい。家の事は何も心配いりません。心残りなく戦ってください」

「有り難う。姉さん、明日はもちろん生還は期しません。義人兄さん（在満洲）、良子姉さん（青島）も遠く、傍に居るのは姉さんだけです。万一のときは、おばあさん、お父さん、お母さんを頼みますよ。しっかり後を頼みますよ」

「大丈夫、大丈夫」父も母も私も、他の言葉を忘れたもののように、同じ言葉だけを繰り返していた。

当直の人に手を引かれ、祖母もやっと辿り着いた。七十歳を越して、足元もおぼつかなかった祖母は、母に支えられて電話の前に進んだ。父が傍らから「おばあさん、これが正明の最後の電話ですよ。よく聞いておきなさい。涙声を出さないように・・」と言った。吾と吾が心を支えるように、祖母は生まれて初めての受話器をとった。「正ちゃん、明日は発ちますか。行っておいで。そして元気で帰っておいで」と。そして後は「ウウ・・」とうなるような声になった。それに答えた弟の言葉を私は知らない。父が「おばあさん、もういいですよ」と代わった。

七十有余年昔風に育ち、〝陛下への忠義〟ということを無上の光栄と信じ込んできた祖母は、いつかは征かねばならぬということは、常に私たちから聞かされ、覚悟はできていた筈、そしていよいよ明日発つという今、精一杯励ましてはみたものの、廿余年育んだ、断ち難い孫への愛情は、叶わぬ望みと知りながら「元気で帰っておいで」の一語に万感を託した。年老いた祖母のことばをどうして女々しいといえよう。「それでこそおばあさんです」と、かえってその心を労わってあげたいような気持ちにおそわれた。

（中略）

―この姉の手記はまだ続くが、一部省略する。両親は夜道を駆けて駅に行き、汽車に乗り、飛行場に辿り着き、既に飛行機に乗っている息子と逢うことができた。その場面を姉が書いている。以下は父母の話である。―

・・少しでも早く着いたら子供に会えそうな気がして、人様の行ける道なら私も行けないことはないでしょう、と近道の方を選びました。

その道の険しい事、時には四つん這いになり、父と生徒さんに両手を引かれ、引っ張り上げられつつ登りました。途中松林の間に兵舎がアチコチ工事中で、ここらで見とがめられたらどうしようかと、何度かビクビクしながら、ようやく十一時十五分過ぎに着きました。

登りついてみますと、それはそれは広い広い飛行場で、向こうの方にたく

さんの飛行機が向かい合って並んでいるのが目につきました。

心は一分でも一秒でも早く飛行機のところに飛んで行きたい思いでしたが、軍規を犯すことを恐れ、又、一旦お国に捧げた子供の後をどこどこまでも尋ねて、女々しいと子供の士気を鈍らせ、その名誉を汚すようなことがあっては、子供に対し申し訳ない、と三人で只うなずき合っていました。

前の晩二時に家を出て三里の道を歩き、更に二里の坂道を登りながら、一口も何も口にしないでいましたので、オニギリでも食べたらと出しましたが、三人とも一口も食べられず、只出しただけで飛行機の方ばかり見ていました。私達の傍を通る人は一人もなく、尋ねる術もなくイライラしていました。母が急に水が欲しくなり、向こうに水道が目につきましたので、父と三人水道のところまで行って水を貰っていましたら、飛行服を着た方が傍らをお通りになりますので、思い切って父が「子供が昨日名古屋から来て、只今ここを発ちますが、面会はできないものでしょうか」と申しましたら、「それはできますよ。後四十五分あります。早く向こうの天幕の中におられますから、お急ぎなさい。この滑走路を横切って天幕のところにお行きなさい」と言って下さいましたので、一生懸命かけ出し、滑走路を天幕の方に曲がった時、「万歳」の声が聞こえました。三人が「しまった」と言った時はもう万歳三唱が終わり、終わったかと思うと、搭乗員の方がドヤドヤと溢れ出るように駆け出してこられ、見る間に自分自分の飛行機に飛び乗られ、飛行機は次々に離陸しはじめました。

百台ぐらいの飛行機だったでしょうか。整備兵の方々があちこち駆け回る・・。エンジンの音、プロペラの音、もうもうと立ちこめる砂塵・・。何と形容したらよいのか、筆舌に尽くし難いものがありました。

「せっかくここまで来て、面会の時間は充分あったのにあんまり遠慮していけなかった。もう仕方ないから〝どうせ面会は出来ませんから、来られた時は飛行機でも見送って下さい〟との電話でしたから、飛行機でも見送りましょう、と立っていましたが、父は、とにかく天幕のところまで行ってみようと言って行きました。（天幕の中は、壮途を祝した乾杯の後をとどめていたそうです）

父が天幕のところに行った後、母の前に搭乗員の方が見えましたので、「あなた方は今お発ちになりますか」と申しましたら「いいえ、私は発ちませんが何か御用ですか」と申されますので、「ハイ、子供が名古屋から昨日来て、只今ここを発ちますが間に合いませんでした」と言いましたところ、「それでは早く「ナコ」と書いた飛行機をお探しなさい」と申されました。

ちょうどそこへ父が「天幕の中には誰もいない」と母のところへ参りましたので、その事を父に伝えましたが、探そうとしても、向こうの飛行機までの間は遠いし、次から次に離陸する度に砂塵であたりの人も見えず、眼も開けられず、どうしようもなく只じっと見ておりました。

そのうち、それぞれの飛行機に「ウサ」「ナコ」の標のついているのが解り、尚もじっと見ていますと「ウサ」の飛行機がどんどん離陸し、「ナコ」の方が残っている様に思われました。

でも、もうとても会えないものと諦めて、飛行機の上る度に「万歳、万歳」を叫びながら見送っていました。

ちょうどそこへ、四十二、三歳の農夫の方が父の前に急いで来て、「あなたは、本城の時任さんではございませんか」父が「ハイ」と申すが早いか、「息子さんはあすこです。指揮官機です」と父の手をギュッと握って駆け出しました。父は「早くお前達も走れ。走れ」と先に駆けて行きました。

母はもうどうにも息が切れそうで、足が運べなくなりましたので、生徒さんに「お父さんさえ会えば良いです。私はもう息が切れそうで足が運べないからいいです」と言いますと、その生徒さんが大変親切な方で、「いいえ、おばさん、もう一頑張りです。頑張って下さい」と、私の手を引いて下さいました。その時又農夫の方が走り戻っていらして「早く。お母さん」と二人で手を引っ張って、ようやく正明の飛行機のところに駆けつけました。

父が先にかけつけ、「正明」と声をかけましたら、正明が「はい。お父さん、来られましたか。お母さんは？」と言ったところへ私がかけつけました。正明はニッコリ笑って後ろを向いていました。父も母も一緒に「よかったね。元気で征きなさい」

「有難う。お父さん、お母さんお体を大事に。おばあさん、お兄さん、姉さんによろしく。本城の近所の方々にもよろしく」と言って、すぐに伝声管で何か申しましたら「操縦席の窓が開き「高橋です。行って参ります」と元気な声でニコニコ笑っておっしゃいました。

「元気で行ってらっしゃいませ。御武運を祈ります」と申し上げますと、すぐに窓を閉め、ジッと前方を見つめていらっしゃいました。正明が「お母

さん、もう少しこちらに寄ってみなさい」と申しますので飛行機の傍に寄りますと、普段と少しも変わらない顔で、いつものニコニコ顔で、「何も思い残すことはありません。喜んで征きます」とニコニコ顔でした。

父も母も、これが最後の別れなどと云う事はちょっとも考えませんでした。只もう万歳万歳で、涙一つ出ませんでした。

吾が子でありながら、神の子のような思いで、有難い有難いと心の中に両手が合わされている様で、これが永久の別れなどということは少しも考えられません。涙一滴出ません。只有難い有難い、万歳万歳と普段出ない大声が出ます。

私達が駆けつけると、女の人夫達十名位「奥さん、良かった良かった」と後ろで泣いています。「どうして？」と尋ねますと、「私達はこんなに長くお話できたのに、一番話さなければならないお父さん、お母さんが折角ここまでいらして、お会いなさることができなかったら、と思っていましたら会われて良かった」と、嬉し泣きに泣いて下さいましたが、父も母も一滴も涙など出ませんでした。

そろそろ正明達の飛行機も離陸の準備が整いましたので、別れを告げて後に退りますと、プロペラが廻り始めました。

正明は白いマフラーの上に、絹のトキ色のハンカチを巻いていましたが、それを解いて一生懸命振り振り、機は地上を離れました。機上の二人は、あたかも烏帽子を被った様に神々しく気高く見えました。

人夫の男女の方々二十人位と父母は声を限りに万歳万歳を叫びました。

飛行機は翼を振りながら飛行場の上をゆるく一旋回し、別れを告げて南の空遠く飛び去りました。

正明達の発った後、まだたくさんの飛行機が残っておりましたので、全部の飛行機の発つまで見送りました。

その日（四月六日）お発ちになった方々は、皆、日の丸のついた手拭の向こう鉢巻きで勇ましい姿でした。そして皆ニコニコ笑ってお発ちになりました。どの飛行機も翼を振りながら、飛行場の上をゆるく旋回して、私達の頭上を南に向かって飛び征きました。

正明の父だと云うことがどうしてわかったかと申しますと、特攻隊の方々が天幕の中に休んでいらっしゃる時、人夫さん達が行っていろいろ話をされ、その間に正明が「私は伊佐郡本城の時任といいます。今日は都合によっては、父と母がこの飛行場に来ているかもわかりません。あなた方、よい折があったら父と母に〝元気で征った〟と伝えて下さいませんか」と頼んだそうです。

それで農夫の方が、もしかしたら・・・と思ってあちこち探していらっしゃったところ、正明とよく似ていて、尋ねて下さったのだそうです。

こうして、いろいろな方達のおかげで面会ができました。面会の時間は十分か十五分だったでしょうか。」

父と母の話は終わった。

こうして弟は征った。朝に夕に睦んで来た弟は、私達の傍を遠く飛び去り、二十五歳の花の盛りを、悔いもなく恨みもなく、南の空に散った。

（以下略）

―本稿は、十三塚原特攻碑保存委員会編の「白雲にのりて君還りませ」に拠る。

碑は語る特攻隊⑨

田中　賢一

空母雲龍と共に沈んだ人々

空母雲龍に搭乗していて海没した陸軍部隊の主体は、挺進集団の滑空部隊であり、特攻隊として出陣したものではないが、私にとっては知己の人が多く、たとえ無事フィリピンに上陸できたとしても、大半は帰らぬ人となったと思うので、この一連の物語に挿入させてもらう。

空母雲龍は昭和19年8月6日、横須賀海軍工廠で竣工し、小西要人艦長の下、1500余名の乗員をもってひたすら訓練に励んでいた。空母であったが既に艦載機はなく、初めての任務はフィリピン方面の緊急輸送だった。陸軍挺進集団の部隊を乗せ、昭和19年12月16日呉軍港を出港したが、19日夕刻台湾沖で敵潜水艦に撃沈されてしまった。乗艦していた陸軍挺進部隊は次のとおりであった。

挺進集団司令部面高少佐以下の人員（集団長、参謀、副官、各部隊長等は空路前進したので乗っていない）

滑空歩兵第一聯隊主力

挺進工兵隊の一個中隊

挺進通信隊の有線中隊

滑空飛行戦隊の飛行場中隊

輸送指揮官は参謀部面高俊秀少佐

忘れられない人々

滑空歩兵第一聯隊長多田仁三少佐は前任者が呉で発病したので、久留米の

予備士官学校より急遽着任し、私は面識がないが、他の指揮官は全部知っているので、印象深い人について述べる。

面高俊秀少佐

この人とは三回も御縁がある。私は昭和12年に士官候補生として騎兵第十六聯隊に配属されたが、その時機関銃中隊が新設され、面高さんが中隊長になられた。将校団の先輩として教えられることが多かった。

次いで昭和16年、私が蒙彊の包頭地区で騎兵の中隊長だった時、旅団の戦車隊長をしておられ、包頭の紅燈の巷で杯を交わしたことがしばしばだった。その頃のことは陸軍挺進部隊銘々伝に譲ることとする。とにかく豪放磊落愉快な人だった。

そして三度目の御縁は、私が陸軍挺進練習部の幕僚で企画等を担当していた時、滑空部隊を新設することになり、戦車を搭載する大型滑空機の実現化を見越して、挺進戦車隊が編成された。この隊長として面高さんが騎兵学校から着任された。

従来からあった挺進聯隊と挺進飛行戦隊のほか新編の滑空機搭乗の歩兵、戦車、砲兵、工兵、通信等の部隊及び滑空飛行戦隊は全部挺進練習部の隷下部隊なので、練習部の業務も多岐にわたり、我々は俄かに忙しくなった。面高さんは挺進練習部という陸軍航空に所属する部隊に戸惑うことがあったのか、よく私に相談に来た。また、逆に私は戦車隊の現職などに参加させてもらった。

かくして1年を経て、昭和19年10月挺進練習部は挺進集団となり、中央で任命した参謀に1名の欠員があったので、集団長塚田中将に嘱望され、面高さんは参謀部付となった。そして、挺進戦車隊長の後任に私が補職された。誠に深い御縁と言わざるを得ない。私は騎兵で乗馬騎兵しか知らなかったが、昭和18年に転兵種学生として半年間戦車学校で学んでおり、挺進部隊内に私以外に適任者がいないので、当然の補職ではあった。面高さんは大層満足して私に申し送ってくれた。

雲龍が撃沈された情報に私は衝撃を受けた。救助された者は数名に過ぎず、台湾に上陸したことも判明したが、その中に面高さんはいなかった。戦後になって人を介して知ったことだが、面高さんは或る将校と船室で碁を打っていたという。その将校（名前も聞いたが失念した）も救助された者の中にはいない。

鈴木英敬大尉

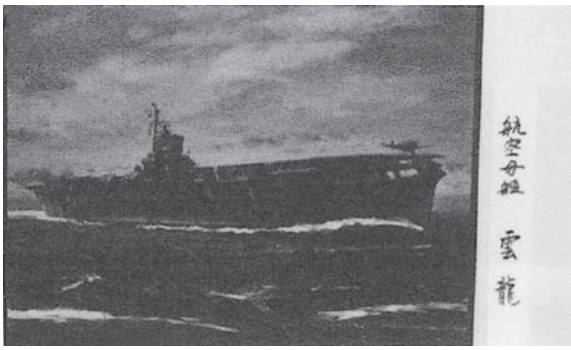
この人は陸士54期で挺進練習部の練習員は私と同期だった。昭和16年の10月頃だったか、練習員の何回目かの降下の際、自動索で頸の後ろの部分を擦り、火傷のような傷を負った。練習部の研究部におり、その傷跡が残っていたので印象がある。

滑空歩兵第一聯隊の速射砲中隊長で雲龍に乗っていた。海に投げ出され、木の破片に掴まって浮遊していたが、傍らに浮いていた兵に「俺は負傷していてもう駄目だから、お前はこの木に掴まって生き永らえろ」と言って波間に沈んでいったという。戦争中に人伝えに聞いた話である。

集団司令部の後藤敬少尉は少候24期で、第一回に南方に出た時は第一聯隊の下士官で、団司令部へ作業員として来て、私の指揮を受けたことがある。その後少尉候補者として航空士官学校の課程を卒えて少尉に任官し、司令部の一員となった時は、意気揚々と私の部屋へも挨拶に来た。純情な愛すべき男だった。

私は、平成6年のことになるが、佐世保の海軍墓地に雲龍の慰霊碑があると聞いて出向いた。碑の前で合掌し、雄図空しく波間に沈んだ勇士に思いを馳せた。

佐世保海軍墓地にある雲龍慰霊碑



空母雲龍　排水量17150屯　全長223米　速力34節
兵装12　７糎高角砲６　25粍３連装機銃21

陸軍挺進部隊銘々伝②

田中　賢一

○初代練習部長河島慶吾大佐

陸軍挺進部隊創設の発端

昭和15年10月、欧州方面駐在から帰朝した井戸田勇中佐（陸士35期）が、東條陸相に報告した中に、ドイツの落下傘部隊の目覚ましい活躍振りがあり、我が国も早急にそのような部隊を創らねばならぬということになり、大臣から岩畔軍事課長に厳命が下った。軍事課では村田勤吾大尉が、航空本部では佐藤勝雄大尉が担当することになった。そして、浜松飛行学校に練習部を創り、練習部長に同校の河島慶吾中佐（陸士33期）を充てるということまで内定した。

一方浜松飛行学校では、練習部を創ることと河島中佐を練習部長にするということの連絡を受けたものの、何のことか分からず、早速河島中佐は上京して前記の二人と協議したが、すべてが暗中模索で、取り敢えず要員を集めるということになり、数名の操縦者と十数名の降下研究員が発令された。

浜松飛行学校練習部、次いで白城子飛行学校練習部

昭和16年早々に全員が浜松飛行学校に集まったが、何をすべきか分からず、降下研究員は体を鍛えねばならぬと、戸山学校に入り、体操を行った。それまで飛行機事故で落下傘降下をした例はあるものの、自分の意志で降下をした例は、陸軍にはなかった。落下傘は97式操縦者用と92式同乗者用とがある。これらをダミーに付けて何回も投下試験を行った。そして、安心感を得て2月の20日、初めて実降下を実施した。勿論、河島中佐が先頭に立って降下した。使用機はスーパー、使用傘は操縦者用だったが、二回目からはAT、同乗者用にそれぞれ変えた。

戦闘部隊要員は練習員と称し、降下訓練を行った。第一次練習員は浜松で教育し、降下場は三方原爆撃場を使ったが、ここが手狭になったので、5月に満洲の白城子飛行学校練習部となった。河島中佐以下職員に変わりはなかった。

河島中佐は飛行第12戦隊で蘭州爆撃を行った時など、随分放胆な行動を執ったが、落下傘部隊では極めて慎重であった。それは、事故を起こすと将来の発展に影響大であると思ったからである。ところが、第二次練習員の降下訓練で殉職者が出た。初宿（しゃけ）軍曹は92式落下傘の補助傘と主傘の傘頂部を連接してある紐が足に絡まり、不開傘となり殉職した。それまで予備傘のある落下傘が試作されつつあったが、まだ量産に入っていない。河島部長は早速上京し、予備傘付きの落下傘の製造を急がせた。間もなく1式落下傘が交付され、第三次練習員から背中に主傘を、胸に予備傘を付けた1式を使えるようになった。

陸軍挺進練習部となる

白城子では中央に遠く、新設部隊の育成に不便である。また、冬の寒さも練習に不便である、というような理由で、昭和16年9月に宮崎県の新田原に移転した。今度は飛行学校の練習部ではなく、航空総監に隷属する陸軍挺進練習部となり、練習部長に久米精一大佐が発令された。しかし間もなく第一挺進団が創設され、久米大佐は団長に補職されたので、河島中佐が再度練習部長となった。南方に出た挺進団の留守業務を担当し、新たに第3、第4の二個聯隊を創設した。

挺進練習部研究部長時代

昭和17年6月に第一挺進団は南方から帰還し復員したので、久米大佐が練習部長に復帰し、河島中佐は研究部長となった。この時の研究部の主な仕事は、戦闘規範の作成にあった。戦闘規範とは、挺進部隊の運用、訓練について記述した教範である。研究部には多くの人材が集められ、それらの人々を馳駆して仕事を行った。

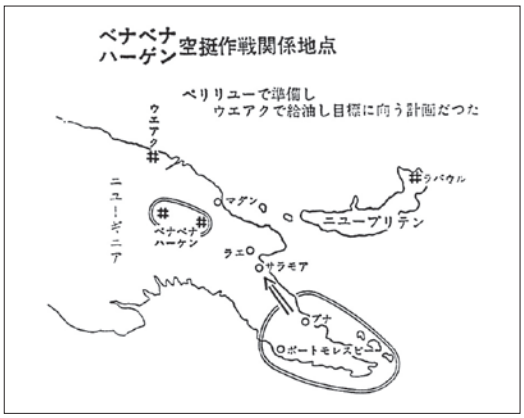
第一挺進団長時代

昭和18年6月のことである。ガダルカナルに敗れ、東部ニューギニアのラエ、サラモア地区が戦闘の焦点になっている頃、第八方面軍ではかねてから注目していたニューギニアの脊梁山脈中のベナベナ・ハーゲン地方に、敵が飛行場を設定中であることを偵知した。その数、大7個、中小5個にも及ぶことが判明した。敵がここに空軍基地を建設し活動を開始すれば、島の北岸にあるウエアク、マダン、ラエ、サラモアと伸びている我が作戦路は横腹に匕首を突き付けられた形となる。現地の第十七軍ではベナベナ・ハーゲン進行作戦の検討を始めた。

大本営では第一挺進団を動員し、第

八方面軍に配属することにした。動員編成の挺進団は挺進第一、第二聯隊重火器隊及び飛行戦隊より成り、団長に河島中佐が任命された。（間もなく大佐に昇任）

河島中佐は上京し、かねてから指導を受けていた杉山参謀総長のもとに出向いた。参謀総長は全般の戦況を述べた後、ベナベナ・ハーゲン問題は、ニューギニア方面の戦局を左右する重大事だと述べて激励した。



河島団長は降下部隊を内南洋のペリリュー島に進め、飛行戦隊をルソン島のストッチェンバーグに置き、自らはマダンに在る第十七軍司令部とラバウルに在る第十八軍司令部に出頭した。ところが、現場の軍司令部では、これまで検討の結果、進行のための道路構築には1カ月を要し、それでもなお担送による補給に頼らなければならず、この作戦は実行不可能という結論が出ていた。挺進団では、既に中継飛行場としてウエアクに設営隊まで出してあったし、杉山参謀総長の激励も受けており、引くに引かれぬ勢いである。たとえ地上部隊が来てくれなくても、挺進団だけで敵飛行場を捻り潰し、糧食は敵から奪って持久すると主張した。特攻隊であり、上級司令部が認める筈はない。戦後河島さんの言を借りれば、騎虎の勢いだったという。

初めの目標が消滅し、部隊はスマトラに移動して駐留し、一時インパール作戦に使われるとも言われたが、その話も霧散し、昭和19年夏、宮崎県の川南に帰還した。

河島団長として最後に行ったことは、サイパン特攻部隊の差出しを命ぜられ、第一聯隊の奥山中隊を指名したことである。このことについては、義烈空挺隊長奥山大尉の銘々伝で述べる。

昭和19年11月、挺進集団編成に伴い、河島大佐は挺進飛行団長に補せられた。最後は北朝鮮の連浦に在って、隷下の飛行部隊の戦力回復を指導中に終戦を迎えた。

石川少尉魚雷に体当たり

航士55期　塚越　朝紀

特攻の始まりは、海軍が、昭和19年10月25日の神風（しんぷう）特別攻撃隊・敷島隊、陸軍が、昭和19年11月5日の萬朶隊、同月7日の富嶽隊であります。これらは、当時最後の戦法として計画し、下命されたものであります。

しかし、その6カ月前未だ「特攻」という言葉すらなかった時に、計画された戦法ではなく、瞬時の自己判断で、敵潜水艦の発射した魚雷に突入し、1300名の友軍の危急を救った勇士の崇高な行動の話であります。（以下は「航空碑奉賛同人会」の会誌「鎮魂」9号（平成15年2月発行）に掲載された拙文でありますが、ご了承を得て、ここに転載させていただきます。）

◇　◇　◇

昭和19年3月、飛行第二六戦隊は、パレンバンに展開しており、私以下5機の一式戦闘機（隼）は、インド洋のアンダマン諸島のポートブレア飛行場に派遣され、同地の防空に任じていた。

同年3月24日、偵察に飛来したモスキートを撃墜しただけで、何事もなく過ごしていたが、4月14日、ポートブレア港に入港する予定の輸送船松川丸の船団援護を下命された。松川丸は、4千噸、タービンエンジン装備、最大速力16ノットの優秀船で、兵員1300名、武器弾薬・資材を満載し、昭南（シンガポール）を出港、駆潜艇1隻、掃海艇2隻に護衛され、12時に入港予定であった。

なお、同諸島には、陸軍の第三五独立混成旅団と海軍の第十二特別根拠地隊が展開していた。

船団掩護の方法は、早朝より1機ずつ、1時間交代で監視掩護に当たり、他は地上待機してセイロンからの空襲に備えることにした。

私は、状況把握のため、一番手で出動した。この日天気晴朗波穏やかで、船団は30km程沖合を整々と航行していた。甲板には、もう上陸も近い故か、完全武装の兵員が鈴なりで手を振ってくれた。上空千mで旋回監視したが、何の異常もなく1時間経過、二番手の石川曹長機と、互いに翼を振って交代した。

着陸して一服していると、海岸の監視哨から「飛行機墜落」と電話報告があり、詳細は不明。私は、直ちに離陸して行ってみると、船団は無事だが、それぞれ蛇行運動をしている。魚雷攻撃を受けたらしい。そして、石川機が

見当たらない。船団との通信手段はない。海面には油も浮遊物も見当たらない。高度を下げて右へ左へ海面を捜査していると、白い大きなクラゲのようなものがかすめた。とって返してよく見ると、落下傘が半開きで水面下を漂っているように見える。護衛艇に確認してもらうため、筆記板にメモをし、艦橋に投下した。

やがて内火艇を降ろしたので、位置を教えるため、目標のそばを銃撃する。内火艇が引き上げてみると、矢張り落下傘である。しかし人体が付いてない。どうしたことかと思ったが、尋ねようもなく、船団入港後、直接聞くしか方法がない。やむなく、三番手と交代して、掩護を続行した。

そして、船団は予定よりやや遅れて、4隻共入港した。船団の連絡を待っていたところ、モスキート偵察機1機が飛来、直ちに1機を出撃させたが、情報入手が遅かったので取り逃がす。船団の入港停泊を見て行ったので、明朝空襲あるべし、と予測した。

その頃、飛行場に乗用車が近づいて来た。先頭車に黄旗(將官搭乗車の印)が立っている。起立して出迎えると、「有り難う。有り難う。おかげで全員無事。現在、資材揚陸中」とのこと。そして委細を聞く。

説明によると、ポートプレア港が近づき、もう大丈夫と思った頃、戦闘機が松川丸の左前方海面に向かって急降下銃撃。更に上昇反転して第二撃。その頃松川丸の見張員は、魚雷が突進して来るのを発見。戦闘機は更に上昇し反転して第三撃目に入った。松川丸は、取り舵一杯、甲板上の物が転げ落ちる程の急旋回で回避したが、魚雷は必中と見えた。

その時、第三撃目に入った戦闘機は、最早これまでと判断したものか、そのまま魚雷に体当たり突入した。そのため魚雷は進路が逸れ、松川丸の左舷すれすれに、かすめるように通過して行った。それで松川丸は救われました。有り難うございました・・・とのことであった。

初めて事の次第を聞いて、感無量、一同手を合わせて武勲を讃えました。私は、「先程、モスキートが偵察して行ったので、明朝空襲のおそれあり」と警告した。

船団は徹夜で揚陸作業を続けたが、降ろし切れず、若干の資材を積んだまま早朝に出港して行った。

我々は、早朝から、セイロン島の英軍機の来襲に備え、今や遅しと待ち構えていた。

正午過ぎ、B—24・12機が来襲、全機出撃。敵編隊は、港を爆撃した後、洋上でUターンする。これに食らいついて3機を撃墜。港の被害は軽微であった。

一応仇は討ったものの、それには替え難い尊い石川曹長の体当たり戦死であった。

石川清雄曹長は、北海道出身の「下士官操縦学生第八二期」で、昭和15年2月熊谷飛行学校、同年11月太刀洗飛行学校卒の戦闘班80名の中の一人であり、七七戦隊から二六戦隊に転属して来た。平素は、決して勇猛豪気の戦士ではなく、むしろ性温厚、上下の信望厚い、技倆優秀な戦闘機乗りであった。

この鬼神も哭く武勲に対し、後掲の「個人感状」が授与され、6月3日付けで、二階級特進して少尉に任ぜられた。

「後日談」

15年程前、偕行社で、私の同期生の会合の席上、「戦闘機の塚越君は貴公か」と尋ねられ、「そうだよ」と答えると、「やあ、命の恩人だ」と言って握手を求められました。その人は、松川丸に乗船していた独立歩兵第二五六大隊の第三中隊長松木茂郎君でありました。誠に汗顔の思いでした。

思えば、私と空中交代して30分後、石川少尉は体当たりをされました。運命とは言え、僅かの時間差であります。もし、私がその場面にあったとして、果たして石川少尉のような行動がとれたであろうか、誠に忸怩たるものがあります。

石川少尉は、実に立派な戦闘機パイロットでありました。

合　掌

感　状

陸軍曹長　石川清雄

右者昭和十九年四月十四日印度洋航行中ノ船団掩護中敵潜水艦ヲ発見、直チニ之ヲ爆撃シ続イテ同潜水艦魚雷ヲ発射スルヤ、前進中ノ魚雷ニ砲撃ヲ加エテ阻止セント努メタルモ、ソノ及バザルヲ見ルヤ敢然同魚雷ニ突入、決死体当リヲ決行シテコレヲ阻止シ、輸送船ノ危急ヲ救ヒ遂ニ壮烈ナル戦死ヲ遂グ。是至誠純忠軍人精神を遺憾ナク発揮セルモノニシテ、真ニ帝国軍人ノ亀鑑タリ。仍而茲ニ感状ヲ授与シ抜群ノ武功ヲ賞シ之ヲ全軍ニ布告ス。

昭和十九年四月二十日

南方方面陸軍最高指揮官　寺内壽一

高野山「空挺部隊之墓」墓前祭

評議員　田中　賢一

陸軍挺進部隊1万有余の戦死者を祀るこの墓は、昭和30年に建てられた。墓というからには、泉下に何かが納められなければならぬ。建墓に当たり、厚生省の書類を調べ、全力を尽くして霊璽簿を作り、泉下に納めた。

建墓のため、生き残りの戦友が浄財を出し合ったが、挺進第三聯隊の軍医中村秀雄の養父中村広三氏が大半を負担してくれた。38年になって建墓の中心人物の中村軍医が死去したので、当時の世話人全員の合意により、中村の分骨を泉下に納めた。これが前例となって、生前に意思表示しておけば、戦友は誰でも分骨を納められることになった。

その頃、戦友と自衛隊空挺退職者及び現職空挺隊員を合同し、空挺同志会なる組織を作ったので、年1回の墓前祭は空挺同志会が行うようになった。それでも初めのころは、戦友が主になって祭典を運営したが、追々老齢化に伴い、戦後の者即ち自衛隊空挺関係者が運営を司っている。もちろん、戦後の人も物故者は分骨を納めることができる。

今年の祭典は、9月14日に行われ、参列者は約２００名、内戦友は7名であった。私は戦死者を念頭に次の一文を捧げた。

追想の辞

戦熄んで六十三年　老耄杖曳き墓前に佇む
嘗て空の神兵と讃えられし亡き戦友よ　旭日映ゆる日向灘　緑織りなす唐瀬原　夕陽沈む尾鈴山　遠き御祖の神々の　天下りしと聞く郷に　真白き薔薇に身を托し　武を練りし友垣よ　老いの瞼に消ゆるなし
花負いて空うち征かん雲染めん
屍悔いなく散るなりと　残して帰らざりしますらを達　思へば追慕の念限りなし
ここに悲憤に堪えざるは　うつし世の様変わりたることなり　物豊かにして心貧しき世となりぬ　我ら嘗ての志　失うことなかりしに
　世に芝蘭の化たるは　微力にして　今や活力を失うに至りぬ
しかれども安んぜられよ　ここに連なる自衛隊員は　亡き戦友の精神を継承し　祖国を托するを得ればなり　我ら老骨のなお為し得るは　国に捧げし友の精神を　後世に語り伝うることのみとなりぬ
語りてもなお語りても尽きざるは
　国に殉ぜしますらをの友
余齢僅かなるも　微力尽くさん
　　(みそなわ)
　　(みそなわ)せ給え

墓前に立ちし感懐を詩歌にしたたむ

巨杉亭々高野の地　浄気漂うこの墓標
刻むは「空」の一字のみ　亡き戦友の御霊あり　スマトラレイテ沖縄と　国に殉ぜし一万余　花負いて空うち征かん　屍悔いなく散るという　詠いし友よ我が友よ　若き面影永遠に　老耄の我杖曳きて　辿り来たりし墓前祭　幽明分かつかの友よ　思いは尽きず在りし日々

からいもの酒杯にうつる君がおも
　あのひげづらに経る年はなし
ひえつきの節おもしろく歌いたる
　君が手ぶりぞよみがえりくる

大命に勇躍出でし日向の地
　隼鷹に乗り発ちし君かも

抜山蓋世の勇あるも　崩るる大廈支え得ず　戦野に屍曝すとも　かねて期したることなれば　君思うらん悔いなしと　我たなごころ合わせつつ　亡き友に会うこの庭で

我々の基地は宮崎県の川南村にあった。酒は皆芋焼酎。宮崎の民謡は椎葉の稗搗き節。挺進第三聯隊は空母隼鷹に搭乗して比島に向かった。

大西瀧治郎中将の副官
門司親徳海軍主計少佐御逝去

会員　及川　昌彦

平成20年8月16日、元第一航空艦隊司令長官大西瀧治郎海軍中将の副官を務められた門司親徳元海軍主計少佐が逝去されました。門司さんはフィリピン・マバラカットの海軍航空基地で、関行男大尉以下最初の神風特別攻撃隊が編成された時の、大西長官の最初の訓示に立ち会われた副官の一人であります。（編注・記録によれば、大西長官は「今の戦況を救えるのは、大臣でも大将でも軍令部総長でもない。それは若い君たちのような純真で気力に満ちた人たちである。皆はもう命を捨てた神であるから、何の欲望もないであろう。ただ自分の体当たりの戦果を知ることができないのが心残りであるに違いない。自分は必ずその戦果を上聞に達する。国民に代わって頼む。しっかりやってくれ」と訓示したという。その時「長官の体は小刻みに震え、その顔が、蒼白くひきつったようになった」と当時の副官門司親徳大尉は証言している。）

戦後門司さんは、軍人恩給の全てを注ぎ込んで特攻隊員始め戦没者の慰霊に尽力されました。特攻平和観音年次法要にも長年参加し続けられました。昨平成19年5月13日、それまで長らく会長を務められた「海軍ラバウル方面会」の解散式の慰霊祭を、靖國神社で斎行し、参加者全員で記念写真（後掲・前列中央が門司会長）を撮影した直後に倒れられて、入院加療を続けられ、一時は回復されましたが、11月頃からは会話もできない状態でした。

亡くなられた8月16日は、奇しくも副官として仕えられた大西中将が割腹自決された命日でした。享年90歳。

謹んで御冥福をお祈りいたします。

第45回海軍ラバウル方面会慰霊祭
平成19年５月13日　於　靖國神社

戦場の砂

田中　賢一

平成20年6月29日の産経新聞に「硫黄島の砂」という一文が載っていた。それによれば、米国の某所にある「海兵隊博物館」で、硫黄島の砂が、作戦図付き１００ドルで売られているという。勝利の栄光を示す意味らしい。彼我合わせて約二万七千人の戦死者の血が染み込んだ砂である。我々の感覚では、その砂に値段を付けて売るということなど、到底考えられない。

戦場の砂については、忘れ難い思い出がある。沖縄・摩文仁の丘の上に、義烈の碑が建立され、昭和51年5月24日に除幕式を行ったのであるが、それに先立って遺族と戦友達は、打ち揃って古戦場読谷飛行場跡に行った。その時、此所で戦死した金山清軍曹の妹さんが言った。

「兄が休暇をもらって帰ったのは4月29日でした。その時、落下傘降下の話はしましたが、特攻隊になっていることは言いませんでした。その晩は母と三人で、父の仏壇の前で寝ました。それから一月ほどして戦死の公報が来ました。そして遺骨が渡されましたが、箱には遺骨は入っていませんでした。休暇で帰ってきた時、紐の千切れた図嚢を残して行ったので、それを遺骨と思って来ましたが、今日は此所の土を持ち帰って遺骨にします」と話されたことを、私は感銘深く聞き、今でも忘れることはできない。

読谷飛行場跡に立ちて

この辺境に　散りしをのこら
狂乱を　既倒に廻らさんの心
燃えさかる　梟敵の　とりで
路傍の小石よ　汝は　見しか
かつての叫喚　阿修羅の怒号
語り聞かせよ　いくさ神の姿
泰平の美酒に酔う　うつし世
知る人ぞ知る　丹きまごころ
あとに続けと　残せしことば
今ここに　つどいしともがら
世につげむ　失いしやまと心
取り戻さずんば　お国危うしと

原町飛行場関係戦没者慰霊祭

評議員　田中　賢一

原町飛行場関係戦没者慰霊顕彰会事務局長の八巻通泰さんから今年も案内状が届いた。10月5日に陣ケ崎公園墓地にある碑の前で慰霊祭を実施するとある。嘗ては毎年参加していたが、平成15年以降欠席している。同期生（陸士52期）では無二の親友吉田穆君は、原ノ町で第65戦隊長に着任したという縁故で、彼は毎年慰霊祭に参加していた。その彼が病没してしまったので、私も意欲を失い出席が途絶えてしまった。それでも案内状だけは毎年送ってもらっている。私は近年歩行覚束なくなり、出ようにも出られなくなってしまった。そこで、古い記録を繙いてみて、この行事にまつわることを纏めてみることにした。

平成11年10月10日に行われた慰霊祭の時、私は霊前に次の一詩を捧げた。

尚武の絵巻　馬追いの
母なる基地に羽ばたきて
皆たかき　つわものが
鵬翼つらね　斗南行
嵐にむかいし　いくさ神
身をもて護りし　大八州
マニラの海の　赤き陽に
懐い馳せしかみちのくの
夕陽映ゆる　国見山
今宵限りと　薩南の
知覧の空に　仰ぐ月
写しまほしき思う人
幽明へだつ　半世紀
明眸皓歯　君がおも
霜鬢燗額　佇みて
手繰る月日の　糸車
雲雀ケ原の　碧き空
情　手篤き　郷の人
我老耄の身なれども
共に抱きし　志
などか忘れん国の為
後に続くを信じつつ
君が残せしいさをしを
語り伝へん　後の世に

注

雲雀ケ原は飛行場のあった所。

その西に国見山がある。

この地で編成し訓練した特攻隊は九隊あるが、ここから出撃したわけではない。比島方面で突入したのが六隊、沖縄作戦で突入したのが三隊である。

異色ある主碑

慰霊碑は、白御影石の台座に、高さ2・4米の両側面石を立て、その内側に飛行服に身をかためた等身大のブロンズ像が立っている。この像のモデルは、昭和19年12月5日フィリピン・サルワン島沖で散華した鉄心隊隊長の松井浩中尉（陸士56期）であり、同隊が女子奉仕隊の見送りを受け、鉾田飛行学校を発った時の写真に拠る。

台座には次の碑文が刻まれている。

「コノ地ハ曾テ陸軍原町飛行場ノアリシ所　昭和十五年以来ココニ育成セラレシ幾多ノ勇士ハ国難打開ノ為ニ敢然トシテ各地ニ戦ヒ　ヤガテ戦局日ニ非ナルニ臨ンデハ進ンデ特攻隊トシテ勇名ヲ轟カシ敵ノ心胆ヲ寒カラシメタリ

不幸事志ト違ヒ勇士再ビ還ラズ飛行場モ亦空襲ニサラサレ土地ノ風貌遂ニ一変スルニ至レリ　今ヤ時移リテ二十六年　往時ヲ回想シテ悲痛言フ所ヲ知ラズ　有志相計リテ碑ヲ立テ戦没ノ勇魂ヲ慰ムルト共ニ曾テ経験セル軍民協力一和ノ記念トシ謹ンデ祖国永遠ノ栄光ヲ祈ル

昭和四十六年八月十五日

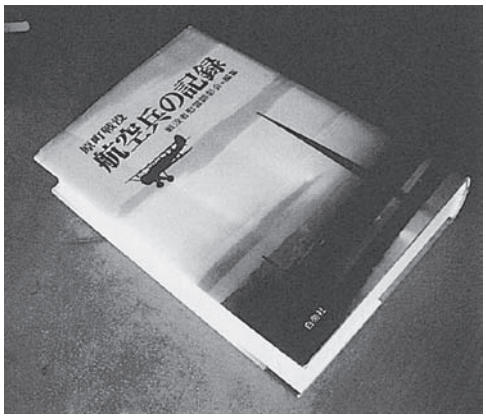
全国七百有志一同」

昭和51年にこの飛行場に縁の深い全戦死者の銅製芳名板が主碑の向かって左に、地元出身戦死者のものが右に創られた。

慰霊顕彰会八巻通泰事務局長のこと

第1回の慰霊祭は昭和46年に行われたのであるが、爾来、碑の建設、慰霊祭の実施に献身的尽力をされたのは、地元在住の八巻夫妻である。

この人が中心になって平成6年に出した『原町戦没航空兵の記録』という本がある。



575頁に及ぶ大冊で、原町飛行場の歴史、そこで訓練した部隊、教育を受けた操縦者の期別等、詳細に記述してある。特攻隊で、ここで訓練したのは、万朶隊、勤皇隊、鉄心隊、皇華隊、進襲隊、皇魂隊、武剋隊、振武第四五隊、神州隊、国華隊となっており、隊名については、ここにいた時のものか。各隊について語り伝えられた話が、印象深く付記されている。

慰霊祭については、第1回からこの本が作られた年の第27回まで詳述してあり、貴重な記録である。

この本の真髄とも言うべきは、戦没航空兵の日記という章である。17名の日記が収録されており、これだけで1冊の本にする価値がある。その一例として、勤皇隊隊長山本卓美中尉のものを紹介する。（以下編注）

山本卓美中尉（陸士56期）は、当協会山本卓眞会長（陸士58期）の兄上であるが、原町飛行場で編成、訓練を終えた特攻隊・勤皇隊（二式双襲12機）を率いてフィリピン・レイテ島オルモック湾の敵艦船に突入散華された。同隊長の日記は、当協会会報「特攻」第40号（平成11年8月発行）に掲載済みであるが、特攻隊出撃までの並々ならぬ苦心を知る貴重な資料（日誌）でもあるので、以下に改めて再録する。

山　本　卓　美
自昭和十九年十月十八日
至昭和十九年十二月六日
昭和十九年十二月七日戦死
（特攻・比島レイテ島　オルモック湾）
八紘部隊第八隊　勤皇隊隊長

母上へ
原町出発以後ノ状況ヲ御知ラセシタイト思ヒ、暫ク止メテ居タ日誌ヲ書キマス、筆不精故、怠ルコトガアルカモ知レマセンガ、死後、何モ知ル手段ガ無イカモ知レヌト思ッテ努メテ書ク積リデス
遺書ト思ッテ読ンデ下サイ　卓美

十月十八日

懐シキ原町ヲ去ル
早朝ノ慌シキ暇乞ヒ、駅頭ニテ隊長殿以下ニ最後ノ挨拶アノ宣言ヲ裏切ルマイゾト固ク誓フ車上ノ人―
最後迄手ヲ振ッテ居ラレタ母上ノ姿ガ眼ニ焼付イテ離レヌ
美シキ想出―原町―サラバ
過去ヲ捨テ、新シキ未来へ
予定通リ水戸着、直チニ自動車ニテ鉾田へ、職員宿舎ヘ落著く
諏訪部大尉殿ト共ニ皆川ヲ訪レ、岩間「アパート」ニ宿ス、諏訪部サンニハ肉親ノ如キ親シミヲ感ズ

十月十九日

羅針盤修正ニテ一日ヲ暮ス
三浦ハ航本ヘ連絡ニ
夜ハ相変ラズノ諏訪部サンノ駄法螺

十月二十日

三浦還ル
我ガ隊ハ八紘部隊第八隊
嗚呼若干二十歳ノ五十六期ニシテ十二機ヲ率イ中隊長タラントス
八紘部隊ノ中隊長ハ総テ五十六期ナルヲ見ヨ、吾等八名ハ共ニ皇国ノ運命ヲ担ヘル決戦兵力ナリ
「諸子ハ航空ノ虎ノ子デアル」ト言ワレシ五十六期、今ヤ続々決戦場ヘ馳セ参ジツツアリ、而シテ我モ亦其ノ一員タルノ幸福ヲ得タルナリ
地図、航空被服、雑品等受領ノ手筈
夜、部隊長閣下ニ招カレテ三浦隊ト共ニ将校六名、御宅ニ伺フ
今西正二モ吾等ト仙幼同期ナリキ、御子息ヲ戦病死ニテ失ヘル閣下ノ心中、如何バカリカ残念ナラン
嗚呼、命トアラバ、如何ナル悲惨ナル死ニ方ニモ甘ンズベキガ軍人ナルニ、此ノ上ナキ死処ヲ与ヘラレテ、只々有難シト思フノミナリ

十月二十一日

試験飛行ヲ企画セルモ果サズ
終日羅針盤修正ト砲調整
二瓶モ東モ実ニ良ク働ク、勿体ナキ部

下ト思フ
純真無垢ナル少年飛行兵六名、我ガ中隊ハ皆若シ、若サガ我等ノ強ミナリ、力ナリ
出発ヲ二十五日ト予定ス、澄谷等ニ会ヘヌハ残念

十月二十二日

試験飛行ヲ実施、思ヒシヨリモ調子良シ、砲調整、羅針修正モ大半終ル
夜、大洗ホテルニテ送別ノ宴、感激ガ大ゲサ過ギル気モスレド、或ハソレガ当然ナルヤモ知レズ
後ニ続ク者雲ノ如シ
其ノ意気、其ノ熱意、其ノ誠心ヲ信ズレバコソ・・・
只々有難ク、嬉シク、皆デ泣ク
　皇国ノ無窮ヲ信ジ
　大東亜戦必勝ヲ信ジ
　後ニ続ク者ヲ信ズ
カクテ吾等ハ安心シテ往キ得ルナリ、
　とこしへに守らざらめやうるはしき
　吾が日の本の　大和島根を

十月二十三日

突然出発早クナリテ明日トナル
整備未ダ不充分ナルモ止ムヲ得ズ
残リノ羅針修正、試飛
午後、九機ニテ編隊飛行
航空被服受領
夜、部下ニ訓話
「死ニ花咲カス」事ヲ考エル丈デモ、ソレハ私心ナリ、吾等ニハ只任務アルノミ、光栄アル任務、華々シキ任務ヲ受ケタルハ吾等ノ幸運ナリ、此ノ任務ヲ与ヘ下サレタル
大元帥陛下ニ対シ奉リ、只々恐懼、有難シ、忝ナシト思ヒ、且、此ノ名誉ヲ辱シメザルノ大努力ヲ決意セザルベカラズ
　七度も　生れ替りて　護らばや
　わが大君の　治す御空を
部隊ノ「マーク」ヲ考フルモ、機番ガ邪魔トナリ標記シ得ズ

十月二十四日　晴

　もの、ふの
　門出を祝ふ　日本晴
愈々出発ノ日
二機、冷却器「パンク」ニテ困却セルモ三浦中隊ヨリ貰ッテ間ニ合ハス
飛行部隊全員整列ノ前ニテ挨拶
部隊長閣下、参謀総長代理、航空総監代理ノ訓示アリテ、出発
　訣別ノ辞
比島ノ決戦ハ皇国ノ運命ヲ決ス　決戦ノ凡テハ制空戦及補給戦ニ在リ　即諸士ガ一機一艦船克ク空母及輸送船ヲ撃滅スルヤ否ヤニ依テ此ノ決戦ノ勝敗即大日本ノ運命ハ決ス
茲ニ山本中尉ノ統率スル八紘飛行隊第八隊ヲ送ルニ方リ武人トシテ最高ノ武運ニ恵マレタル諸士ノ幸運ヲ祝福スル外、更メテ述ブル辞ナシ　諸士ノ父母兄弟亦我等ト思ヲ同ジクスルコト信ジテ疑ハズ
最後ニ諸士ニ告グ　鉾田教導飛行師団最后ノ一人一機ニ至ル迄必ズ必ズ諸士ニ続キ醜敵ヲ殲滅シ　皇運ヲ泰山ノ安キニ置キ奉ランコトヲ誓フ
諸士安ンジテ征ケ
　今西少将
部下ヲ犬死サセヌ事、只ソレ丈
出発ノ際感激ナキニハ非ザレド、余ハ比較的冷静ナリキ、見送ル人々ヨリモ十二機堂々鉾田上空ヲ出発
宮城ヲ拝シ
富士ヲ仰ギテ
美シキ日本、嗚呼、吾ヨクゾ日本ニ生レタル、湧然タル感激感動始メテ生ズ
雲一ツナキ好天ニ、巍然聳ユル雪白ノ富士ヲ仰ギテ何トイフ事ナシニ涙下ル、母上ノ、同胞ノ住ム帝都ヲ後ニ、大阪へ
　大空に　桿を握りて　涙しぬ
　真白き高き　富士を仰ぎて
悠久ノ日本、必ズ護リ抜カント誓フ
　米鬼ども　来らば来れ　とこしへに
　我が日の本は　ゆるぎなければ
無事全機柏原着、一安心、
菅谷大尉殿ニ甘エテ充分整備センコトヲ期ス、一機汽笛割レ
八尾、ます屋ニ宿泊、夜映画ヲ見ル

十月二十五日　雨

天気余リ香バシカラズ、整備
遂ニ雨降リ出シ、一日中降リ続ク
菅谷大尉殿ノ御好意ニ甘エテ整備モ思フ存分ニ実施シ得タリ
汽笛交換、ペラ交換、砲調整修理等、整備出来ル所デ徹底シテ実施セン事ヲ期ス
藤井少佐、佐藤栄来ル
「マーク」記入、徹夜ニテ作業ノ由感謝ノ外ナシ
新宿荘ニ宿シ、図ラズモ航空廠ノ宴会ニ引張リ込マレ、大分飲マサレ弱ル、感激性ニ富ム親切ナ良キ人々許リナリ
五十四期日高大尉殿ト十一時過迄遊ブ

十月二十六日　晴

好天気ニ乗ジ出発セント朝ヨリ整備ヲ急ギシモ、遂ニ十四時ニ間ニ合ハズ、プロペラ一機、地上衝突一機、「タンク」及電纜一機、尾輪一機等、予期セザル故障続出、出発中止ノ止ムナキニ至ルラジオニテ神風特攻隊ノ戦果ヲ聞キ、未ダニ内地ニ愚図愚図シアル現状ヲ思ヒ、焦燥ノ感無キヲ得ズ

十月二十七日　曇後雨

九時出発ヲ期シ整備ヲ急ギ、概ネ完了セルモ、予期セザル故障続出、漸ク十二時出発準備完了
時既ニ遅ク九州、四国共雨トナリ逐次悪化、訓練ヲ兼ネ引返ス覚悟ニテ出発

セントセシモ、視度不良ノ為、遂ニ涙ヲ呑ンデ中止
嗚呼、止ンヌル哉
慎重、慎重　大事決行迄ハ
　見送リノ人々ニ相済マザルモ、中止ヲ宣言ス、仲々肚ノ要ル事ナリ
空襲警報、分散セルモ敵機ヲ見ズ
植木行方不明、心痛ナリ
昼夜共揮毫攻メニ会フ、禿筆ヲ呵シテ書キ撲ル
立テ続ケニ数首ヒネリ出ス、風流気ナキ武骨男ノ筆下手ハ困リモノ
○八紘に御稜威の光りかゞやかし
　われ南溟に　雲と散らなむ
○みたみわれ　武夫たりし甲斐ぞあれ
　今南海に　華と散り得て
○ゆるぎなき大和島根と　とこしへに
　我が荒魂は　天翔らなむ
○身はたとへ　南の果に散らむとも
　守り抜かばや　大和島根は
○比ぶなき　幸かな我等　選まれて
　今決戦の　華たらんとは
○わが後に　続かむ者は　数多あれば
　とはにゆるがじ　すめらみくには

十月二十八日　曇

今日コソハト意気込ミテ飛行場へ赴ク、天候香シカラザルモ、飛行可能ト判断シ出発、歓呼ニ送ラレテ新田原へ十五戦隊ト共ニ著ク、背風ニテ大分苦労セルモ車輪屈曲一機、作動油モレ一機ニテ済ミシハ何ヨリ
航空寮ノ特別給食ニテ祝宴
若林、山岡等ニ会フ

十一月二十九日　晴

新田原ノ天気ハ良好ナラザルモ、気象偵察機ノ報告ニヨリ、飛行可能ト判断シテ出発ス、種子ケ島迄視度不良、下層雲多ク、相当苦労ス、奄美大島以后ハ快晴
沖縄北飛行場ニテ補給後、直路台北ニ向フ、夕刻台北著、着陸ハ視度不良ノ為大分苦労セリ
一機尾輪引込ミ、一機尾輪パンクノ外、無事ニ着陸、先ヅ安心ス
西参謀殿ニ案内セラレ、北投温泉ノ「佳山」ヘ、酒ト、肴ト、舞踊ト、歌ト到ラザルナキ歓待ヲ受ケ、既ニ此ノ世ノ人ナラズ
飯島美代子サンヨリ血染ノ鉢巻ヲ贈ラル、感激ニ堪ヘズ

十一月三十日　曇

ユックリ朝風呂ヲ浴ビテ御馳走ヅクメノ朝食、堀江国民学校ヨリ贈ラレタル卵ニ舌鼓ヲウツ、写真撮影後、九時出発、FD司令部ニ到ル、参謀殿ノ好意ニテ比島方面ノ情報、艦船攻撃ニ関スル資料等ノ学科ヲ受ケ、又大藤、石垣、河野、小国等ト会フ（FDは飛行師団）
前ノ庭ニテ師団長閣下以下ト会食、北川閣下モ来ラレ仲々ノ盛会ナリ
恩賜ノ煙草、御供米等ヲ戴キ感激ス
新聞記者ノ総攻撃ニ会フ
飛行場ニ到リ試運転実施、異状ナキヲ確メ、二瓶ノ叔父サンノ家ニ寄リタル後宿舎ニ帰ル、佳山ノ待遇筆舌ニ尽シ難シ、帰ルヤ否ヤ搗キ立テノ餅、大福、更ニ麦酒ト肴ノ猛攻アリテ、後ニ控フルスキ焼キ、舞台ニテハオ嬢サン方ノ舞踊、美代子サン姉妹ニモ踊ラセテ、全ク思ヒ残ス所ナシ
此ノスキ焼キノ材料ハ台北市長ノ贈リ物ナリト、全ク感謝ニ堪ヘズ
宴半バニシテ北川閣下ニ招カレ、更ニ二瓶、東ト共ニ第二次会ヘ、五十六期ノ精鋭ヲ集メテ騒ギ抜ク、軍司令官ヨリ贈ラレシ鮎、西瓜、鳳梨等モアリ
　浜までは
　海女も蓑著る時雨かな
是、北川閣下ヨリ贈ラレタル言葉、肝ニ銘ズ、騒ギ疲レテ帰レバ、又モヤ寿司、嗚呼我ガ腹ノ一ツナルヲ如何ニセン
美代子サンノ心憎キ迄ニ誠心籠レル親切ヲ受ケ、感謝、只感謝ノミ註、美代子サントハ此ノ宿舎ノ小母サンノ姪ナリ

十二月一日　曇

早ヤ今年モ終リノ月ニ入リヌ
兵長等伍長ニ任官（士官ハ少尉任官）
名残リ尽キザル思ヒ出ノ佳山ヲ下リテ飛行場ヘ、山ノ下迄一同送リ来ル
天候不良ナルモ、師団長閣下以下ノ見送リニ、出発スルニ決ス
周囲ノ山々ハ黒雲垂レ込メテ相当不安アリ、申告モ終リ、目的地モ「マルコット」ト決定、イザ出発セントセシニ、六号機尾輪引込ミ、大慌テ
予定ヨリ約二時間遅レ、盛大ナル見送リノ中ヲ離陸
美シキ思出、台北ヨ、サラバ
桃園―新竹、雲高低ク、超低空ニテ漸ク飛行、台中頃ヨリ雲上ニ出デ、嘉義ニテ再ビ雲下ニ潜リ、視度不良ノ中ヲ漸クニシテ屏東ヘスベリ込ミ
一機スピンナー脱落ノ外異状ナシ、安心
見送リノ盛大モ考ヘモノナリ、飛行部隊トシテハ全ク有難迷惑、台北モ半バハ追出サレタル格好ナリ
屏東ニテ第四特攻隊ノ遠藤以下ニ会フ
夜ハ婦人会ノ方々ノ接待ニ与リ稍々呑ム

十二月二日　曇

地区司令官ヨリ追出サレントシタルモ二機ペラ交換、一機尾輪引込ミノ修理ノ為、明日ニスル如ク頑張ル、真ニ特攻隊ノ為ヲ思フ人ナラバ、ト考ヘサセラル、慎重第一ガ究極ノ目的ニ合スルヲ信ズレバコソ
十二機揃ッテ此処迄来レルニ、今更一

部ヲ残シテ追及セシムルヲ得ンヤ
一日中整備、第四、八紘隊ノ出発ヲ見送ル
鳳山戦車隊ノ同期生ニ会フ
夜、舞踊モアリテ仲々ノ盛会ナリ

十二月三日　晴

午前一杯整備、早目ニ昼食シ、十二時半頃離陸、婦人会、女学校等見送リ盛大ナリ
空中集合、航進発起セルニ一機見エズ、引返シ見ルニ、再度離陸ノ途中ナリ、安心ス
愈々晴レノ比島入リナリ、高度二千三百、雲上一時間半ニテバシーヲ越エ、ラオアッグ着、砂塵濛々トシテ咫尺ヲ弁ゼザルモ、漸ク着陸、強風ノ為滑走距離ハ短クシテ停ル
燃料補給ニ手間ドリ、十七時過ギ離陸、リンガエン附近雨ナリシモ突破、二機追求遅キヲ心配ス、アラヤットヲ仰ギ感慨アリ
マルコット着陸モドウヤラ全機無事、ホット一安心、先ヅ第一ノ難事ハ終レリ
全ク肩ノ荷ヲ下シタル心持ト、全機無事ヲ誇リタキ気持ニテ一杯ナリ、サレド此ノ蔭ニ官民、飛行場大隊ノ援助ト、整備班ノ努力ト、僚機ノ苦心アルヲ忘ルベカラズ、全ク余一人ノ手柄ニハアラザルナリ
夜遅ク迄分散ニ手間ドリ、十二時過ギアンヘレスノ宿舎ニ泊ス、乱雑ナル上蚊帳悪ク、一晩寝ラレズ敵機数機、一晩中ニ亘リ単機攻撃ヲ加ヘ来リ時々爆弾ノ地響キヲ聞ク

十二月四日　晴

午前中連絡トレズ、アンヘレス宿舎ニテゴロゴロシアリ、食事モアマリ上等ナラズ
何トナク身体ダルシ、高山ニ会フ、奇遇ナリ、午后、迎ヘノ自動車来リテ飛行場ニ赴ク、マニラ、ニィルソン飛行場ニ至ルベシトノ指示ヲ受ケ、直チニ出発セントスルモ、分散徹底的ナル為集合ニ時間掛リ、更ニ一機メリ込ミタル為離陸遅レ、十八時将ニ離陸セントスルヤ、入江機尾輪引込ム、止ムヲ得ズ追及ヲ命ジ急遽離陸ス
ニィルソン着ハ既ニ薄暮ナリ、着陸時烟霧アリテ視度悪ク、更ニ、飛行場ハ中央高ク傾斜甚ダシキ上ニ無風ニテ、皆滑走著シク延ビ、遂ニ湯浅機、北井機、加藤機、各々小破、中破、大破ス、此処迄来テ飛行機ヲ壊ストハ実ニ残念、更ニ注意ヲ与ヘ置ケバ可ナリシニ等ト悔ユルモ及バズ
全員ヲ帰シ、四航軍ニ連絡
美濃部参謀殿ニ会ヒ、四航軍作命ニテ四師団ニ編入セラレタルヲ知ル
四師団ニ行ク、近藤少佐殿ニ状況ヲ伺フ、レイテ方面ノ戦況ハ一刻ノ猶予ヲモ許サズ、即刻特別攻撃ヲ指向スベキ状況ナリ
之ガ為急速ニ出動準備ヲ完了セザルベカラズ、最初、機首ヲ改修シテ爆薬ヲ装シ、威力ヲ強化セント希望シ居タルモ、此ノ戦況ニテハ之ヲナス暇モナカラン
将校ハ偕行社ニ、主力ハ航空寮ニ泊ス
第十三飛行中隊ノ協力ヲ謝ス

十二月五日　晴

整備班ハ飛行場ヘ、空中勤務者ハ第四師ヘ、マニラノ街モ久方振リナリ、以前ト大シテ変リタル所ナク自動車ノ往来繁キニ一驚ス
師団長、参謀長ニ申告
松井等ノ隊ハ鉄心隊トテ、カロカン飛行場ニ在リ、焼カレシ飛行機ヲ補充シテ三機、本日出動スル予定ナリト　富嶽ハ屡々出動（クラークヨリ）シアルモ空母ヲ逸シテ帰還シアリ、石川モ生キアル由、万朶ハ佐々木一機ノミデ昨日今日出動ス
軍司令部ニ赴キ軍司令官閣下ニ申告、古山圭三（同期生）、閣下ノ稚児サントナリテ副官振リモ仲々板ニツキアリ
御賜ノ酒、煙草ヲ戴キ乾杯
勤皇隊ト命名セラル、勤皇隊、維新ノ志士ヲ思ハシムル此ノ名、佳イ哉、閣下モ「快心ノ名ナリ」ト言ワレタリ、冀クハ此ノ名ニ恥ヂザラン
後、勤皇ト書シタル鉢巻ヲ戴ク
広間ニテ休憩、記者達ト語リ写真ヲトル、古山ノ親切、何彼ト有難シ、尾形（同期生）モ居リ、一緒ニ昼食ヲ御馳走ニナル
勝又、南出、軍司令官閣下ノ御意志ニテ夫々進級、有難キ事哉
通信二名、出張ノ名目ナリシモノ一員ニ加ヘ、攻撃ニ参加セシムル事トナル
四飛師ニ行キ師団長閣下ト乾杯、折カラ入江機追及、ニィルソンニ着陸セルヲ知リ、直グ呼ブ、入江ヲ連レテ申告セシメ、軍司令官閣下官邸ニ到ル
久シ振リニテ風呂ニ入リ菓子ヲ食ヒ、ピアノヲ叩キ、一同大イニ寛ログ
四航軍ノ方々ト夕食ヲ会食ス、滅多ニ食ヘザル御馳走許リナリ、殊ニ刺身ノ味ハ忘レラレズ、航士校当時教官タリシ溝口中佐モ高級副官トシテ居ラレ、其ノ他隈部参謀長閣下始メ、皆良キ方々許リナリ、嘉義ニ居リタル芸妓モ加ハリ、五十六期ノ人々ノ話ナドシ、思ヒ出ニ耽ル、
雛千代トカ言フノハ踊リ上手ナリ
充分ニ酔ヒテ官邸ニ泊ル
嗚呼、吾ハ幸福ナル哉、全ク思ヒ残スコトナシ

十二月六日　曇

官邸ニテ御馳走ノ朝食ヲ済マシ、四飛師ニ到ル、果然任務ヲ受領ス
明拂暁、全力ヲ以テレイテ湾敵艦船ヲ攻撃スベシト
早速飛行場ニ赴キ出動準備
愈々晴ノ出陣ノ時ハ来リヌ
イザ、征カン哉、心ハ躍ル
三十七耗、二〇耗取卸シ、爆弾装備等
二〇四戦隊ト一三abノ協力ヲ得テ作業ヲ急ギ、一方、湯沢、北井、加藤ニ後事ヲ托シ、クラークニ飛行機受領ニ行カシム
機首二百瓩一発ヲ増加装備スルハ一世一代ノ慾ヲ出シタリ
急刻、四飛師ニテ命令受領（abは飛行場大隊）
二十九戦隊、キ84ニテニィルソンニ到リ、土橋少佐以下八（六）機ニテ直掩、十五戦隊ノ司偵一機戦果確認、打合セヲ実施ス
折シモ護国隊遠藤、同掩護隊ノ山本（同期）来リ、共ニ征カンコトヲ誓フ空挺部隊、レイテ島ニ挺進ス、幸先ヨシ、参謀長殿ト会食
愈々最后ノ夜ナリ
出撃前夜、何ノ感動モナシ
思ヒ出ヅルハ母上ノ顔ノ皺
台北ノ美代子サンノ顔
只々征カン哉、任ノマニマニ
浜マデハ海女モ蓑着ル時雨カナ
機首ニ装シタル一〇〇瓩弾、参謀長殿ノ命ニテ遂ニ信管ヲハヅスノ止ムナキニ到ル、残念、二百五十瓩ノ信管、弾底ナキ為大分モメタルモ、遂ニ片方弾底信管ヲツケ行クコトトナル、効果少クトモ、爆発ノ確実ヲネラフ、吾等ハ空挺、斬込隊ト異リ此ノ目ニテ戦果ヲ確認シ得ザルヲ以テ、完全、安心シ得ル丈ノ衝突準備ヲ整ヘ置カザルベカラズ
夜、遺品整理
明朝七時離陸
イザ　レイテ湾へ
敵輸送船へ

勤皇隊（二式双襲）

中尉　**山本　卓美**　陸士56　大13　オルモック湾　19・12・7
少尉　**二瓶　秀典**　陸士57　大13　オルモック湾　19・12・7
少尉　**東　直次郎**　陸士57　大12　オルモック湾　19・12・7
伍長　**林　長守**　少飛12　大13　オルモック湾　19・12・7
伍長　**入江　直澄**　少飛13　大13　オルモック湾　19・12・7
伍長　**大村　秀一**　少飛13　大15　オルモック湾　19・12・7
伍長　**片野　茂**　少飛13　大14　オルモック湾　19・12・7
伍長　**白岩　二郎**　少飛13　大14　オルモック湾　19・12・7
伍長　**増田　良次**　少飛13　大14　オルモック湾　19・12・7
伍長　**勝又　満**　仙10　大12　オルモック湾　19・12・7
曹長　**湯沢　豊**　#87　大7　レイテ湾　19・12・10
軍曹　**北井正之佐**　#91　大8　レイテ湾　19・12・10
伍長　**加藤和三郎**　少飛13　大13　レイテ湾　19・12・10

註　#印は転科操縦教育の期を示す

山本中尉と考案の部隊マーク

全長×全幅：10.6×15.02メートル
自重：3,695キログラム
乗員：２名
発動機：三菱100式空冷1,080馬力
最高速度：時速517キロ
航続距離：2,260キロ

二式複座戦闘機「屠龍」甲型（二式双発襲撃機とも呼ばれる）

報告

「特攻勇士之像」秋田県護国神社に代わり能代市八幡神社に奉納される

理事長　菅原　道熙

当協会では、特攻勇士の英霊奉慰顕彰事業の一環として「特攻勇士之像」を全国の護国神社に奉納する運動を進めておりますが、秋田県護国神社につきましては、次のような事情から、同神社境内に建立することが難しくなりましたので、その代替地として、最も相応しいと思われる秋田県能代市の八幡神社境内を選定し、来る10月26日に建立除幕式を挙行することとなりましたので、その経緯をご報告いたします。

秋田県護国神社は、明治2年に招魂社として、秋田市の高清水丘に創建されましたが、明治32年、千秋公園本丸に遷座され、昭和14年に護国神社と改称されて翌15年、再び創建の地、高清水丘に遷座されました。

西暦733年、時の朝廷は、北東北地方制圧の拠点として、秋田に城を築かれたということが、文献に残されているようでありますが、場所は特定されていませんでした。（編注・聖武朝の天平5年（733年）蝦夷地（東北地方）平定の日本海側の拠点で、最上川河口（酒田）近くにあった出羽柵（柵城―木柵を廻らせて築いた保塁）を一挙に雄物川河口（秋田）付近にまで押し進めて秋田城とし、更に天平9年（737年）には奥羽山脈を越えて太平洋側の拠点、多賀柵（仙台付近の多賀城）と出羽柵を結ぶ道路を開いたことが『続日本紀』に記録されている。）

昭和30年代の半ばに、開発工事中、高清水丘から遺跡が出土して、同丘が城跡であると特定され、その地区一帯が国の史蹟として指定されました。その結果、護国神社の敷地はすべて史蹟に包含されることとなり、以来、境内の現状変更には文化庁の許可が必要となりました。したがって、慰霊碑や像の建立は、事実上困難ということであります。

一方、能代市では、終戦50年を記念して、大東亜戦争末期に陸軍特攻の二次基地であった、能代飛行場（地元では東雲飛行場と呼んでいる）で教育訓練を受け、特攻隊員として散華された勇士の慰霊碑を建てようと、「東雲飛行場を語る会」が発議して、平成7年7月13日に、飛行場の西北方、程近くにある延命寺に、木柱の東雲飛行場慰霊碑が建立されました。その後、平成12年に「東雲飛行場慰霊奉賛会」と改名した同会は、木碑を石碑に改め、場所も能代市の中心部にある、由緒深い八幡神社の本殿脇に移す計画を進めていました。

同奉賛会会長の武田安一氏は、偕行誌上で当協会の方針を知り、「特攻勇士之像」を慰霊碑に並べて建立したい旨申し出て来られました。

秋田県護国神社には、前記の事情で勇士之像を奉納できないので、当協会では、武田会長のお申し出は、誠に相応しい代替案であると考え、靖國神社の御意向を伺ったところ、全く同じ見解を示されました。

以上の経緯を経て、来る10月26日に除幕式を開催するということで、計画が進められているということであります。詳しくは次号（平成21年2月刊行予定）で報告いたしますが、取り敢えず、秋田県では、「特攻勇士之像」の奉納は、護国神社ではなく、能代市の八幡神社になったことを御報告いたします。

（平成20年10月1日記）

福井縣護國神社奉納
（平成19年４月13日）

愛知県護国神社奉納（平成20年４月４日）

宮城縣護國神社奉納
（平成19年10月22日）

鹿児島縣護國神社奉納
（平成19年４月12日）

事務局からの報告等

寄附者御芳名（敬称略）

（平成20年7月1日～9月30日）

（単位千円）

五〇　赤羽　潤　一〇
一〇　大穂　利武　七
七　早田　亮彦　五
五　岡田　豊　五
五　津覇　実雄　五
五　降矢　達男　五
五　山本　卓眞　五
三　大塚　昌元　三
三　鈴木　克美　三（財）全慰協
三　高梨　久義　三
三　竹原　虎男　三
三　西村　芳行　三
三　松本　司　三
三　村田幸之進　三
二五三浦　晨平　二
二　新　忠信　二
二　石井　豊喜　二
二　内田　修二　二
二　勝見　賢二　二
二　河島　慶明　二
二佐々木ひろ子　二
二　土田　八也　二
二　長谷川　清　二
二　町田　義雄　二
二　三宅　浅男　二
二　深山　明敏　二
二　湯澤　一枝　一
一　上村田佳子　一
一　三河内健作　一
一　千田洋之助　一
一　牧野　道子　一
御芳志誠に有り難うございました。

◇　◇　◇

新入会員名簿（敬称略）

（平成20年7月1日～9月30日）

宮城県　木村　重夫
埼玉県　梅澤　美子　北橋　光春
千葉県　清水　春雄　田村　京子
東京都　家崎　務
㈱エアースタジオ
大林　素子　川田　三郎
川和　秀夫　菅原　操
鈴木　昌二　高岡　隆裕
中山真由美　春田　健二
藤田　信之
神奈川県　小豆野　実　中村　真
平野　勝也
岐阜県　諸　達成
愛知県　鵜飼　爵優
山口県　井上　進　原野　一也

◆　◆　◆

会員訃報（敬称略）

謹んで哀悼の意を捧げます。

群馬県　高橋　徳光（18・9・14）
東京都　新井　邦夫（20・1・1）
神奈川県　小菅　静夫（20・3・15）
神奈川県　永田　幸夫（20・5・19）
香川県　山崎　弘（19・11・10）

会報「特攻」等正誤表

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

（訂正箇所）

○会報「特攻」第76号

10頁　4段目15行目

誤　防衛官僚

正（挿入）防衛大臣、防衛官僚

11頁　4段目22行目

誤　草産す屍

正　草蒸す屍

20頁　1段目15行目

誤　川島慶吾中佐

正　河島慶吾中佐

○協会委託販売図書紹介

誤　田中賢一著「陸軍挺身部隊外史」

正　田中賢一著「陸軍挺進部隊外史」

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

1　原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めでお願いします。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願います。

3　慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4　原稿、写真等は、原則としてお返しいたしませんが、必要の場合は、その旨お書き添えください。

5　会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当協会事務局宛としてください。

記

〒105－0014　東京都港区芝2－5－19　TAビル4階

（財）特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会事務局

電話　03－5730－1016

FAX　03－5730－1017